

平成28年(西暦2016年)11月

瞑想録(その16)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみに科学ではありませんし、科学が万能だとも思っていません。科学でない最大のポイントは、あまたの思い付きについて証明を一切拒否していることです。私にとって証明行為は、つまらない時間の垂れ流しに過ぎません。内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。

なおこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

この一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2015. 09. 19

1、サザエさん症候群

サザエさん症候群という言葉がある。日曜の午後7時ごろの国民的テレビ番組と言われる「サザエさん」が放映される頃になると、「あ～あ、また明日から仕事かよ」などと陰鬱な気分になる国民的病状を言う。私ももちろんこの重度の患者である。この番組が嫌いなあまり、スポンサーの東芝の不買運動もしているほどだ。

このサザエさん症候群について、「時間帯が悪かっただけの偶然で、番組のコンテンツが悪いわけではない」という擁護意見があるが、間違っていると思う。その証拠に放映時間帯はほとんど変わらない「モヤさま症候群」とか「TOKIO症候群」とか「イッテQ症候群」とか、そういった言い方はしない。

ここはやはりサザエに、番組固有の庶民感情の逆などがあるということだ。たしかに磯野家の集まりやサザエさんのキャラクターやストーリーに、私も言いしれない不快感を覚える。やはり一番強烈なのはサザエの性格だ。一見明るくて誰にでも好かれそうでどこにでもいそうなキャラクターだが、実は猛烈に頭が悪くて死ぬほど無神経でし

瞑想録(その16)

かも何のはばかりもなく「自分の天下でござい」とばかりに大手を振って歩いている、この存在感にたまらない反吐を覚える。ここは「サザエ脳」という言葉を使わせてもらうが、「(福沢)諭吉がなんぼのものか知らんけど諭吉さん(万札)欲しいわ〜、アハハ」、これほどのバカでノー天気である。

もちろんサザエは何の毒もないし暗いところもない。自分の実の両親と同居して、やはり凡人を絵にかいたような3世代で変に仲良くやっている。ここで注目してほしいのは、この善良そうなサザエと磯野一家が単なる製糞機で何も生産していないことだ。こういうノー天気で無神経な奴は誰の隣にも一人や二人はいるだろう。そしてこういう人種が誰よりも風を切って生きている。だが彼らだって衣食住は必要だ、つまり人数分のGNPを消費しているわけである。

これは全体としてどういうことを意味するか。サザエとその一家がのうのうと暮らす分のGNPを、我々社畜が代行生産しているということだ。天皇陛下でもないただのおバカな庶民がノー天気に安楽する分を我々がヒ〜ヒ〜支えていて、感謝されるどころか地球一でかい態度をされる。これが頭に來ないわけがない。

ところで私の信条は普通の人のように「勤勉は善だ」とか「何かを子孫に残そう」ではなくて、「楽しい無駄こそ人生だ」だったはずだ。それならサザエの無駄も当然に許せるはずではないのか。そこが違う。私の言う無駄とは厳密には「一見の無駄」であって、本物の無駄ではない。例えばネジメ正一さんや西村賢太さんのように、一見ごくつぶしに見えながら実はある日大化けして新文化を提唱するような人たちだ。こういう新文化の創生は、「まじめな経理部員」みたいな人には絶対出てこない。ちゃらんぽらんやスネ夫君からしか出ないものだ。こういう事象を前提として無駄を奨励している。

この観点に立ったときに、サザエさんや磯野家がこういう大化けをするように見えるだろうか。まったくあり得ない。単なるノー天気の鈍感で何の悩みもないからだ。悩みのない人は何も生産しない。人間は「罪さえ侵さなければ全員善人」ということはない。むしろカラバッジのように罪以上の成果をあげる人のほうが、よほど貴重なのだ。

そのサザエさんの視聴率が、先週2桁を割ったと騒然となっていた。つまり世の人々は、「サザエは視聴率2桁が当然だ」という認識だ。サザエのようなアホたちを日本人のなんと1千万人以上が見て、しかも自分と親近感を抱いているというのだ。つまり日本人の半分以上が、実はサザエ脳なのだ。これはかなり重篤な病である。もはやこの番組は、「残りの日本人を洗脳するためにある」といったほうが良い。つまりこの安っぽいものを称して、「これが日本人の守るべき家族の絆だよ」と洗脳しているのだ。

ところでこの手の国民的平凡家族物にはほかにも「ちびまる子ちゃん」とか「クレヨンシンちゃん」とかいくつかある。そしてこれらについてはなぜか頭に来ない。仮に日曜の夕方に放映していたとしても頭に来ないだろう。その理由はおそらくこれらの家族と我々社畜が利益相反しないからであり、バカが偉そうにしていないからだろう。

ところで今「サザエは洗脳番組」だと言ったが、何のための洗脳か。それは憲法の自民党改正案を見ると分かる。周辺諸国の脅威に係る国防力強化を主眼としながらも何気なく24条に「家族は助け合いなさい」と、戦前の家制度の復活とともとれる一文を紛れ込ませているのだ。その理由として自民党のパンフレットには「行き過ぎた個人主義の是正」と明記されている。まさに個人の自由の制限が立法の目的なのだ。

よく考えてみよう。誰にでも働かずにごろごろしている親戚の1人くらい居るだろう。昼からパチンコ屋に入りびたりとかだ。そして間もなくカジノ法案が通る。これらを総合すると、「カジノですったって親戚にたかれば済むだけさ」となる。まさに正直者が馬鹿を見る世界が明日やってくるが、その先兵がサザエだというのは読みすぎだろうか。懸念であってくればよいのだが。

最後にもしサザエの放映日が花金の金曜日の夜だったら人々はどのような反応を示すか、私はどう感じるかを瞑想してみた。金曜日は解放される喜びの曜日だ。すると喜びのあまりサザエなどあまり癪に障らなくなってくる気もする。いずれにしてもサザエなど見ないだろうが。ということはやはり日曜日のサザエ、これが魔物なのであろうか。

2、あるトルコの青年

もう何か月も前だが、とあるモールのコンコースでトルコの青年と偶然出会った。そのコンコースは物販屋台がいつも数台、取り替わりつつ居る。そしてその青年はその時の物販やの一人でトルコの伝統工芸品等を商い、結構流ちょうな日本語を話していた。身なりも小ぎれいで、ヒッピーとかそういう類には見えなかった。

そのトルコのイスタンブールを連想させるバザール風の陳列が、私の興味を引いた。見るだけかもしれないが良いかと聞くと、快諾してくれた。私自身も、ちょうどオスマン帝国に関する本を読んだ直後だった。エルトゥールル号の話などすると彼も乗ってきて、結構盛り上がった。ちなみにエルトゥールル号とは明治23年に日本を表敬訪問した帰りに、台風に巻き込まれて沈没したトルコの軍艦である。地元漁民が何名もの遭難者を救出し、日本とトルコの友好の象徴となっている。

瞑想録(その16)

その彼の思想や哲学が面白かった。一言でいえば「汎トルコ主義」とでも言うべきか、いやそれ以上に雄大なものだった。歴史的にはオスマントルコは第一次世界大戦まで、イスラム世界の盟主として600年続いた帝国である。それまではイスラムの盟主がアイデンティティーだったが帝国が消滅してムスターファ・ケマルが共和国を樹立すると、その国是は徹底的な世俗主義となりトルコはそのアイデンティティーを汎トルコに求めることとなる。ここで汎トルコというと中央アジアのチュルク系国家群がその中に入ってくる。

ところが彼の思想はもっと広い。5世紀にアジアからヨーロッパにかけて諸民族が西進する形で移動した際に活躍した、フン族の王アッティラを「大トルコの祖先」として尊敬しているという。アッティラはゲルマン語で書かれた古典のニーベルンゲンの歌にも出てくることから分かるように実在の人物で、今のハンガリーあたりに大帝国を築いた人物で映画にもなっている。フン族は匈奴の後裔ともハンガリー人の祖ともいわれており広い意味でチュルク系であるが、現状のハンガリーは多民族国家で、アッティラに対する思い入れは特に強くない。しかもハンガリーはもはやキリスト教国家である。

そしてその青年がアッティラの次に尊敬するのは、砂漠の雄であったティムールだという。ティムールは中央アジア出身のチャガタイトルコ人でモンゴルが多少混血している可能性があるのだが、彼にとっては純粋にトルコの先達なのだ。しかもティムールはオスマントルコにも侵入して時の帝王のバヤジート1世を捕虜にして幽閉しているので考え様によっては仇敵にもなりうるのだが、その青年にとってはトルコ内の単なる内輪もめに過ぎず、かつ優秀な方が勝っただけという理解になっている。

さらに彼自身はトルコ生まれだが、中央アジアのヒヴァとかブハラといった古都を自分の第2の故郷あるいは精神上的の故郷と考えているという。これらの地域は長い間モンゴル系の支配下にあったが、モンゴルに敵意は無いようだ。むしろチュルク、モンゴル、ツングースを全部まとめて親せきと考え、それらすべてに一定の親近感を持っているかのようであった。

そして日本とトルコは友好国であるだけでなく、「敵も共通」という意味で利害も一致すると言っていた。その敵国とは中国とロシアである。ロシアについては歴史上領土の取り合いで何度も戦火を交えており、最近問題になっているクリミアだって一時はトルコ領だった程なので理由はわかる。むしろ先日トルコのエルドアン大統領とロシアのプーチン大統領が握手したことが、歴史的には信じられない事象だ。

瞑想録(その16)

他方中国について彼の中国が嫌いの理由は第一に新疆ウイグル地区のトルコ・イスラム同胞を迫害していること、第二に中国人はトルコのバザールにやっても大声で騒いで値切りを繰り返し場合によっては盗んでさえ行くマナーの悪さだという。「日本人と中国人は正反対で気が合うわけがない」とも言っていた。

イスラム国やイスラム教の特に男尊女卑についての見解も聞いてみた。本来イスラムや聖典のクルアーンは正しくかつ寛容に生きる「人の道」を教えたものだが、その成立の過程で各地域の古い風習が入ってしまい間違いや誤解を与えているという。また現在トルコに宗教系の諸政党が増加していることについては、それを認めつつもトルコ共和国の成立の歴史からして「宗教国家にあと戻るとは思っていない」と言っていた。

ちなみにこの話をしたのは3月前のトルコ軍のクーデターよりも前のことであったのでこれについては聞くことができなかった。一般的には軍と宗教は政治という一つの権益を取り合ういわば競合相手にあるところ、つまり軍は一般に世俗主義保護の方向に働くものだ。おそらく彼はこのような軍の拮抗作用と民衆に根強い世俗第一主義を背景に、こう判断したのであろう。

彼のこの広大な、厳密な意味での学問成果をやや逸脱した世界観は私にとってある意味新鮮であった。政治は学問ではないから、「こういう持っていき方もありかな」との感触を得た。日本に例えればあたかも、日本人と在外日系人が同胞であるのはもちろんのこと、「源義経ジンギスカン説」を通してモンゴルとも兄弟だと呼びかけるようなものだ。だが事実とはまったく外交手段としては、それほどに大風呂敷なやり方もあるいは必要なのかもしれない。

3、歴史の進歩

かなり昔になるが、「世の中は物理的には量子力学で作動しており、量子力学の本質は反確定的な確率論であるから、世の中がどう進んでいくかは多分に偶然にしか過ぎないはずなのに、なぜか歴史を概観すると蓋然的に一定の方向に進んでいくように見える」ことを指摘した。量子論を超えた大統一理論の存在だ。端的には紆余曲折を経ながらも人類は、原始共産制、都市国家、奴隷制度、王制、民主制と進歩してきた。

ところで歴史とは主として人が作るものであるから、人ひとりひとりにもいわば「ミクロ歴史」があって、このミクロ歴史が互いに相互作用して、あたかもミクロ経済学が相互作用的集積をしてマクロ経済学になるようにマクロ歴史として結実するものと考えれ

瞑想録(その16)

ば、とりあえず個人単位のマクロ歴史に既にこの手の進歩が見えても良いということになる。

他方でこれまで何回も、人のあらゆる行為と好み、危険回避とか嬉しい時の笑いとかその他諸々は大元としては本能として事前に組み込まれており、個々の選択や感情はその応用として拡張していったと位置づけられることを見てきた。つまり人の脳内のやり取りは物理的にはシナプスとニューロンという回路間の電子のやり取りであって量子論的確率論だが、その回路全体は事前に本能を発揮するように確定勝つ合目的的に組み込まれているという意味において、全くの偶然にはならないわけである。

そういった確率論と確定論の程よい組み合わせで人は出来ていて、その後の学習と経験によって回路はますます複雑に自己組織化されてきたのが個々の人のミニ歴史であるならば、これら人の相互作用の結果として形成されたマクロ歴史も程よい確率論と確定論の組み合わせだという主張にも納得がいく。そしてマクロ経済よろしくその時のマクロの蓋然法則が、確率論を超えてもなおある歴史の一定方向だということになる。

私の最近の個人経験を紹介する。興味に任せてユーチューブの動画をサーフィンしていた。ある時は老人破産関係、またある時は痴呆症対策関係、さらにある時は行政制度関係、なぜか全く飛んで北極圏の文化人類学、また飛んで古事記や日本書紀の成り立ちと、ユーチューブは番組が一つ終わると次候補を羅列してくれるのでその選択肢の中から飛び続けるという意味では連続しているものの、何回も飛んでまた飛んで結局最終的に歴史の概観に関する動画に落ち着いている自分が居る。これらの行為は次候補を選択肢の中から選ぶという意味では確率であるが、自分自身のこれまでのサーフィンを振り返ると結局今頭の中にあるのがこの記事の題目にあるように「歴史の進歩」であるから、「どこからどう経由しようと今の動画に行き着いだろう」と感じざるを得ない。歴史とはこのようなものではないか。

ここで注意すべきことは、確率論というと一般にサイコロ振りを想起するところ、アナログ世界はデジタル世界のように数字という要素がすべて平等なわけでもないし等間隔でもないという点だ。だから時代や局面ごとに影響力の強い人や進路の分岐に決定的な人がいるということだ。そしてこの「太い人」を追うのが正しい歴史学である。マルクスは当時の分子熱力学に影響されたためにこの点を見間違えて「構成者の影響度はすべて同程度」としたために、非現実的な歴史観を提供してしまった。

この一定方向とは一言でいうと、人が自由で過ごしやすくかつ選択の多様性が保証された社会への非可逆的な方向である。もちろん人にとって自由とか過ごしやすいということの意味は異なっているし、またすべての人が勤勉でも協力的でもないから、この流れはしばしば逆行し、しかも極めて遅々としている。ともすれば時間だけの経過はあってもまた制度等の変化はあっても、それが本当に進歩なのか疑いたくなるほどである。イスラムに潜む男尊女卑がその典型である。

この歴史の進歩を考えるとときに、それを構成する人をタイプ分けしてみるのには意味があるだろう。一人一人に下りすぎれば細かすぎて見えなくなり、また人をひとまとめにしても今度はその多様性が見えてこない、そのちょうど中間レベルというわけだ。分類という行為自体は科学的手続きである。分類方法はいろいろあるだろうがここは一応、①究理型、②撮り鉄型、③社畜型、④サザエ型の4種に分けてみた。

ここで究理型とは研究者や技術者のように真理を求め新しいものを作りたいタイプ、撮り鉄型とは打ち込みはするがその対象は極めてマニアックで非生産的なタイプ、社畜型とはどんなつまらない仕事も無感動にこなすが定時には帰宅して退職金で余生を暮らして死んでいくタイプ、そしてサザエ型とは何の考えも気遣いもなく時間を垂れ流すだけのタイプである。

ここで究理型は新しい発見や物の制作を行いたい人々なので何らかの新しいものを作る。そしてそれらの新しいもので我々はそれまでにできなかったような快適さと知識を得、病から解放され、色々便利になっていく。ただここで便利と進歩は全く別物だという点に十分留意してほしい。進歩というからには心の発展、より高貴な気持ちになれたとか、より広い選択肢を持てたとか、より微妙な心に同情できたとか、そういった自由をもたらすものでなければならない。

この意味で撮り鉄型はどうだろう。彼らも究理型ほど熱心であるが得る成果は極めてマニアックでありしかもしばしば伝承されない。彼らには究理型並みの達成の充足感はあるが、多分に一代限りであり彼の内側の個人的な出来事に過ぎない。ちなみに今の私もこの分類に入る。

社畜型はこの世の潤滑油であるが、特に探求心や執着が強いわけでもなくたやすく取り換えが効き、普通の暮らしをして普通に大過なく死んで忘れられていく人々だ。彼らはまじめに仕事をするがその成果の賞味期限は数日か数か月程度、場合によってはその瞬間のみだろう。私も若いころは、好き好んでではないがこの分類にいた。

瞑想録(その16)

最後にサザエ型はどうだろう。この手のタイプに悪人はいない。単に鈍感なだけである。鈍感が悪だといえど悪に入るのかもしれないがその程度は著しく軽い。要するにおてんとうさまのエネルギーを無駄に垂れ流してごみを無意味に増やしているだけなのだ。

では結局どのタイプが歴史を進歩させるのか。特にそのキーマンとなるのはどういう人か。冒頭にも記したように人類は原始共産制から始まって民主制までたどり着いた。その民主制は究極であろうか。私にはそうは思えない。今の民主制は王制に負けず劣らず愚かな指導者を輩出してきた。現に民主制度の守護神である米国の次期大統領選挙も、人口が3億人もいながらヒラリーかトランプかという、最低と最悪のどちらを選ぶかという「選びたくない選挙」になっている。

だから結論から言えば民主制よりもさらに優れた制度を提案できる人が次の時代へのキーマンである。その人物が今あげた4類型のどこから出るのか、私にもわからない。ただ奇想天外な発想は必要であろう。その意味で私は従来から「アングラが次世代への生みの親」と主張している。個人的には撮り鉄型が第一候補である。

4、ロッキー青木

最近ホームレスとか老人破産とか下流物の本ばかり読んでいた。嫁様から「もっと成功者の本を読んで上昇志向になれ」と叱咤されていたので、ロッキー青木の「人生死ぬまで挑戦だ」を読んでみた。

ロッキー青木は日本レスリング学生チャンピオンから人生をスタートして、単身米国に渡った。ハーレム地区でのアイスクリーム売りから始めて、全米に劇場型日本食レストランの「ベニハナチェーン」を展開した。同時にボートレーサーでもあり太平洋気球横断の最初の成功者でもあり、挫折したものの米国でカジノリゾート開発プロジェクトを推進した。差別の国アメリカで文字通り八面六臂の活躍をして、10年ほど前に70歳で事故死ではなく床の上に病死した。典型的なアメリカンドリーム成功者である。

ベニハナチェーンは内装を徹底的に日本式にしてエキゾチズムを出し、料理は基本的にステーキだが鉄板で客の前で焼いて見せる。その時コックは踊ったりアクロバットをしたりとかして、ショー的要素を出すというものだ。最近こそ似たような商売をする他業者も出てきたので、結構な人が似たようなディナーを一度は楽しんだかもしれない。彼の哲学は、「ディナーは単に食ではなくエンターテインメントだ」である。

瞑想録(その16)

彼は私が米国に居た頃すでに、最も知られた日本人として米国人の話題になっていた。あのころアジア人1世の経営成功者といえば、中国系でパソコン先発の「ワング・ラボラトリー」創設者の王安(オン・ワング)とロッキー青木であった。今回は合わせてロッキーの三番目の夫人である青木恵子さんの、「世界のビジネスルール」も読んだ。

2人に共通して言えることは、差別とドリームと金の国米国で成功するには一重にやる気と工夫と人脈だという主張だ。この点はロッキーの口癖が「ビジネスの基本はノーハウでなくノーフー(どんな知り合いが居るか)だ」で、恵子さんの主張が”No news is bad news.”(話題にも上らないのは最悪だ)に表れている。そして良い知り合いを得るコツは「郷に入っては郷に従え」、つまり米国のセレブのルールに完全に合わせることだという。

具体的には、「仲良くしたい人にはまずこちらの魅力をアピール」、「服装で判断されるので見てくれに注意」、「上位校の同窓生の一員となって水平展開する」、「ホームパーティーで人を招くときは客の組み合わせに細心の注意」、「あえてファーストクラスに乗ってリッチさを見せるとともにセレブと知り合う場所とする」、「利用しっぱなしではだめで対等の付加価値を返す」、「慈善労働や慈善献金は当然の義務」等である。まあ当たり前といえば当たり前で実行に特別の知恵はいらないが、日本人には窮屈なところもあるだろう。

ロッキーの方は一応慶応大学OBであるが、恵子さんの方はビジネススクールの短期コースを出てはいるものの基本的に短大卒である。ルールはいずれも窮屈であってもなり切れば特殊な才能がなくてもできる基本的な物ばかりであり、むしろある意味頭が切れすぎないほうが馴染みやすいようなルールばかりである。逆にこの2人の話の特徴として、親戚の話が一切出てこない。日本は一族主義なので叔父とか従弟とかまるでバカでも仲間に入れなければならぬが、米国はさすがに合理主義で能力差別を効率よく実践するのは善なのだ。

さてこうして少なくとも表面上は完全に米国人になり切った青木夫妻、毎日寝る時間も惜しんで世界を飛行機で飛び回る超多忙で、「きわめてやりがいのある人生や時間を送っている」という。その言葉に嘘はないと思う。少なくとも本人たちは本心からそう感じている。

だが私が彼らの本を読んで素朴な読後感として感じたのは、むしろ一抹の「寂しさ」であった。なるほど彼らは精いっぱい頑張っている。だがいったい何のためになのだろう。「頑張りましたね、それで？」という素朴な問いが私の中で空しくこだましていくのだ。

瞑想録(その16)

そこまで外人に合わせて自分を捨てて、本当に楽しいのだろうか。私など人間が鷹揚なせいか、夜空の星を眺めたり四季の草花を眺めたりたまに座禅をしたりの方がよっぽど充実している。

手や品を変えて自分を大きく見せてまで知り合いを増やして話を聞いて次のビジネスのヒントにしてギブとテイクをしてという手間のかかる手段を取るよりも、私にとっては図書館に行ってすでに絶版になってしまったような掘り出し物の本を探しては気が向いたときに気が向いた部分だけ読む方が、よほどその著者なり主人公と深く知り合えた気持ちになるのだ。

人を生で知ると本で知る、どちらも自分の世界を広げる手段だ。本は字に頼る分だけ間接的になるものの、交換条件が要らずかつ一生を1週間で読めてしまう。私は本の方に軍配を上げる。それになにより、何の役にも立たないぼつとした時間の余裕やありがたみを私は身に染みて知っている。

私が見たロッキーは、あたかもお釈迦様の掌の中で精いっぱい暴れて見せる孫悟空のようなものだ。彼はさも自分の意志で大活躍したように思っているが、実はアメリカンドリームを書かれたシナリオを忠実に演じただけの操り人形ではなかっただろうか。

5、無と空と無限

通常の数字(デジタル数字)は整数を基本とし、0から始まって1, 2, 3...と等間隔に増えていく。もっとも競技等の順位を考えれば、1から始まるという見方もある。1着が金メダルで最高で、「0メダル」というものはないからだ。ここに0だけ特別とする考えがあり、「零の発見」という本まである。

整数は全部平等というのも一つの見方であるが、整数のうち0と1は特別だという見方もありうる。0はそれに何をかけても同じ0であり、1はそれに何をかけてもその数になるという意味で特別な位置を占めるという見方だ。この見方は、「掛け算は足し算をもとにでき、足し算は整数の等間隔ができるという順序では、掛け算を整数の何らかの性格の根拠にするのは逆順序だ」と見えるかもしれない。だが整数列から掛け算に至るまで何等の情報追加もないので、「既に予定されている」とも言える。

瞑想録(その16)

また整数の中で0だけは無であり、残りの整数はすべて有である。とは言え「2は有々」
ともできるのだろうし、「9以下は無で10以上が有」という切り方も数学上は何ら問題
がない。つまり有と無の区別は、単に国語と意味論の問題であるという見方もある。

さて私は10年以上も前に書いた第1論文の「アナログ思考のすすめ」の中で次のこと
を指摘した。零とは「無いという状態がある」ことを意味し、これは不完全である。そし
て真の「ない」は「無いし、無いという状態もない」という、大悟徹底した「空」(シュニヤ
ー)であるはずだという主張だ。そしてこれと対極に無限についても、デジタル無限の
「あるという状態はない」が究極の無限ではない。「無限という状態もある」のが大悟
徹底した無限であって、これにはアチントヤ(不可思議)という名称を付けておいた。
空とはわかりやすく言えば、「何個ある？」に対して「そもそも質問に該当しない」とい
ったところか。

これらの提言は現在でももちろん有効だ。だが「無いし無いという状態もない」とは確
かに大悟徹底してはいるものの、現代論理的には矛盾を含む。「状態がないならば主
体も存在しないからその有無を言えない」というのが現代の論理学の立場だからであ
る。ところがこのブログではこれまでに、従来の論理学と相いれない表現や状態につ
いて山ほど議論をしてきた。そして矛盾とは、あってはならないことというよりも「一つ
の含蓄のある状態である」ことはすでに示してきた。含蓄ということで空は無よりもは
るかに高い存在であるということだが、これはデジタルの世界でなくアナログの世界で
見据えるべきだともいえる。シュニヤーはアナログ数字の零に当たるということである。

同様にしてアチントヤもアナログにおける無限であるにとらえたほうが分かりやすい。
それは現代の数学では「無限がある」とは言い切れなくて、言うに矛盾になるので表
現しにくく理解されにくいと同様である。結局アナログ数は非順序不当間隔で、空に
始まり無量大数に終わるといえる。

アナログ世界における空とは絵画や山水画に例えれば、絵の構成を考える以前の心
象にすらいき当たっていない状態である。これは全く何も始まっていない宇宙創成以
前の状態で、画用紙すらないのだから空である。同様にしてアナログ世界の無量大
数とはデジタルの抽象的無限と異なって現実存在しているはずだ。そしてこれは、
絵の究極としているモチーフそのものと見るべきであろう。いずれにしてもシュニヤ
ーとアチントヤ、いずれも顕教の世界ではありえず密教の世界での存在とみなすのが
適当である。そして空と無量大数については今言葉で説明はしたものの、実際は不
立文字なので感じて感得してもらうしかない。

瞑想録(その16)

ところで冒頭で、デジタルには0と1が特別な意味を持つとした。そしてアナログに翻訳すると0は空になる。では1をアナログ的に見るとどうなるかという、1の持つ意味は「完全」である。どういうことかという、1をアナログ的に壊すとそこから無限個のアナログ集合が有機的に零れ落ちるのだ。逆のほうが分かり易いが、有機的なアナログ集合群を相互作用も含めて丸め混むと1になるのだ。この感じも感得してもらえない。

さて、デジタルとアナログの逆進的相同性の観点からは、これらは完ぺきな鏡対称ではなくて、デジタルは直線的だがアナログは系統樹のようになる。ただし完璧な系統樹ではない。つまりローカルにはこのような「系統樹」の系統はあるにしても、デジタルとの相同性を強調するあまり「すべては1に帰着する」と思い込むのは行き過ぎである。

例えば相撲では優勝や準優勝といったデジタルな白星の数に基づく順位のほかに、技能賞・敢闘賞・殊勲賞の3賞がある。またかつてのオリンピックで疾走中に邪魔をされたが最後まで走り切って銅メダルとなったブラジルのデリマ選手には、順位メダルのほかに別途クーベルタン男爵賞が贈られている。これらの賞をどう考えるべきであろうか。

そもそも相撲にしてもマラソンにしても競技というものは様々な側面を持っていて本来はアナログである。この意味では変に数字の順位をつけずに「全員参加賞」でも良いのであるが他方で順位をつけたいという人の希望もあって、一面的である悪弊を知らながらもあえて時間とか高さといった数字で割り切って順位をつけている。だがアナログのデジタル化は弊害も大きく、勝ち負けや商業主義といった単純デジタルに走りすぎて本来の崇高な目標が見失われやすい。そこでこれらの数字とは別途独立に、典型的なアナログである感動を形に表そうと、これらの賞が存在していると思われる。

もちろんこれらの賞も根本的には競技の内容という基本単位の個別具体的な発露という系統樹的な見方も可能ではあるが、それではこれらの賞の目的である感動を、変に客観的かつ唯物的なものにしてしまいがちだ。ここはやはりこれらの賞は崇高なものとして孤高に輝いているとしたほうが、人の自然な気持ちに合うのである。そしてアナログの本質とは感動である。

こう見てくると私が10年以上前に「アナログ思考のすすめ」を書いた時の予想である、「デジタルは下から無限に向かいアナログは上から無限に向かうがそれらはいわば鏡対称である」という「相同性の予想」にはどうも限度があるというか当初予想したほ

ど単純でないことが見えてきたが、それはそれでそれなりに貴重な成果と受け取っている。

6、戦国時代が仮に

戦国時代、今から400～500年前の下剋上の無秩序時代でその後の日本の在り方をも大きく変えた時代です。その戦国時代について最近ユーチューブで、「もしも○○だったら」という「歴史が仮に」の番組を数本見ました。

その仮にとは、①もし織田信長が本能寺で死ななかったら、②もし関が原で西軍が勝ったら、③もし江戸幕府が江戸時代初期に鎖国をしなかったらの3設定でした。そして識者の推測はそれぞれ、①日本は統一されたがキリスト教は入ってきた、②石田三成に力はないので群雄割拠の時代が長引いた、③日本人特有の勤勉性により世界に先駆けて産業革命を達成したであった。いずれも歴史のクリティカルなポイントをついた面白い設定で、対応する回答もなるほどと思わせるものであった。

「歴史が仮に」は難しいテーマである。実は上記以外にもう一つ問題提起があって、④もし信長が桶狭間で討ち死にしていたらどうなったかであり、識者の回答は「今川は上洛したが戦国時代は長引いた」であった。だがこの設問で視聴者が本当に知っていたことは今川のその後ではなく、「信長が居なくて日本の統一はあり得たのか」であるはずだ。

信長は桶狭間では絶対的の不利で、一か八かの奇襲戦であった。そしてもし信長が桶狭間で本当に討ち死にしていたら、それは単に弱小なバカ殿の当然の死として歴史上ほとんど意味なく忘れられていたことだろう。つまりこれを逆に考えれば、歴史というものはどんな小物がキーパーソンに躍り出てそれまでの延長を覆すかわからない科学なのである。それを延長で答える無理はあるもののこれは脳トレとしてはなかなか卓越していて、米国のMBA等でも「もしノルマンディー上陸に失敗したらその後の世界はどうなったか」などと授業でまともに議論させる。

ところで戦国時代の価値を考えるのに大事な視点が2つあると、私は思う。それは、①日本は最終的に植民地にならなかったか、②大和魂や日本人特有の自然を愛でる潔い武士道精神が現代まで受け継がれてきたかの2点である。だから「歴史で仮に」を議論するときも、回答が特にこの観点に触れていないものは不完全だと私は思う。例えば設問③の回答で「日本人の文化の高さと勤勉さで産業革命をいち早く成し遂げた」というのはなかなか面白い回答だと思いつつも、科学技術の吸収をキリスト教

瞑想録(その16)

の受容なしでできたとは思えない。そしてもし産業革命を達成したとしても日本人の大部分のキリスト教への改宗が伴ったのであろう故全く目出度くないと言うところまで答えて欲しいのである。

ところで私には今回の動画での設問以外にも、日本近世史に関していくつかの素朴な疑問がある。すなわち主なものは、①信長の天才性はどうやって先例なく生まれたのか、②島原の乱に乗じてどうしてカトリックが割り込んでこなかったのか、③明治の開国後なぜ日本だけ欧米列強の植民地にならずに済んだのか、④戦国期にはあれだけ日本に食い込んで大名すらも改宗させたキリスト教がなぜ明治の開国後は影響が極めて限定的だったのか、⑤なぜ日本は開国できて朝鮮はできなかったのか、である。いずれもいま日本が精神性の高い統一国家でいられるという奇跡のための、キーポイントであろう。

さて、ユーチューブの最初の3つの設問とその回答に戻ってみよう。信長が現実的に日本を統一したが、彼は西洋かぶれでもあった。では彼はキリスト教を受容したであろうか。これはつまり、彼がキリスト教にイノセントであったためにうっかり植民地にされなかったかという懸念である。これに対する私の答えは「最初は受容したがキリスト教が調子をこいたところで弾圧した」である。もともと信長は無神論者である。だからキリスト教宣教師の話も聞いたのだが興味本位にすぎず、入信する気は全くなかった。

日本布教の親玉であったルイス・フロイスは、自分に好意的であると思えた信長が日本を統一する過程を好ましく見ていた。おそらく最後に日本をまとめて乗っ取ろうという魂胆だったことだろう。ところがある日信長は「自分が神になって部下におひねりを投げさせる」という行為をやって、これを見たフロイスは腰が抜けて歩けないほど落胆したという。また信長は延暦寺の焼き討ちも平気でやっている。宗教的権威など認める気は毛頭ないのだ。

なお信長の先見性についてはこれがどう形成されたかというよりも、西郷隆盛と同じように出現のタイミングが時代にちょうどマッチしたと云うことだろう。江戸時代の大塩平八郎とか天一坊とか石川五右衛門と言った外道たちは、戦国時代だったらひとかどの武将に成り上がったのかもしれない。

次に西軍勝利の場合を考えよう。まずは島津とか毛利とか上杉とか伊達とか有力大名の群雄割拠になったであろうが、信長や秀吉が植え付けた日本統一という新思考は日本にしっかり根付いていた。だから思うに戦国時代がまた長く続いてキリスト教に食いつく隙を与えるというよりは、どれかの大名筋が日本を再統一した可能性が強

瞑想録(その16)

い。ただ幕府は江戸でなかったために、今の首都は東京でないどこか別の場所だっただろう。

最後に鎖国がなかった場合を考える。ここで開幕50年後に中国で明王朝から清王朝への交代があったのだが、江戸幕府は秀吉の前例があるので深入りはしなかっただろう。むしろ海洋国家の面目躍如で、アジアの各地と貿易をして富んだ交易国となっただろう。ただ現代の日本人のマインド、天皇を中心に四季風月を愛し潔い武士道の醸成にはどうしても260年の江戸爛熟文化が必要だったと私は考えている。この観点からは鎖国と開国のタイミングは結果的には絶妙だったと考えるのだが、どうだろうか。大和魂が熟成し定着したおかげで、開国後の基督教の食い込みは限定的なものに終わったという順序だ。

ちなみに開国後に日本を一番欲しがったのは植民地競争に出遅れた米国とドイツとロシアだっただろう。だが米国ではすぐ後に内戦(南北戦争)があったために内政で手いっぱいだった。ドイツもプロイセンが統一して間もなくで余力がなかった。ロシアもすぐ前のクリミア戦争で疲弊していた。これらは結果的に極めてラッキーである。結局日本を狙えるとしたら英仏であっただろうが、このどれからも日本から地政学的に遠かった。そして日本が思いのほか早くに軍備を整えて開国27年後には日清戦争で勝利しているほどで、結局英仏に隙を与えなかったというのが実際のところではないか。

7、経験論理

人との意思疎通を図り行動を決定する元になる心象は、大きく分けて論理、経験、感情の3種があります。本日はこのうち論理と経験が、どのようにどの程度寄与しているのかを見てみます。

本日も、青木雄二さんの「ナニワ金融道」を教科書にしての文脈解析を試みます。この漫画をテキストに採用する理由は、①メンバー間のやり取りの丁々発止に油断がなくて話し合いという合意行為がどういう流れで進んでいくかの典型となっているからと、②建前や机上の空論の全くない唯物論的な現実性で成り立っているからです。

先ず話の前提です。

銭田というミナミのトイチ(10日で利子1割)の闇金融が、経営は素人の軽薄企画の社長をだまして取り込み詐欺による計画倒産を図る。灰原の帝国金融もこの会社に貸しがあったので、倒産を聞いて軽薄企画に回収に乗り込む。ところが銭田が、「俺の貸しは3億円で桁違いだから未収金や残りの財産は全部俺が持っていく」と言い出

瞑想録(その16)

す。怪しいとにらんだ灰原は対抗策として小口債権者の債権を額面の2割という高水準で買い取ってやはり大口債権者となり、銭田と対決する。債権買取りの結果債権者は銭田、灰原、あと取り込み被害に遭った高級外車ディーラー営業4人の計6人になる。

以下に彼らのやり取りを、簡略化の上転載します。なお関西弁は標準語に直してあります。

(6人で債権者委員会を結成する)

4人:1人だけ3億円というのは突出し過ぎていて不自然だ。

銭田:俺は軽薄の社長が3億円借りたという公正証書を持っている。

4人:3億円もどうやって調達できたのだ。

銭田:有り金をかき集めてきて貸した。

4人:あんたは本当に単なるコンサルタントなのか。

銭田:そうだ、金融は素人だからいじめるな。

4人:明日から全員で未収金の集金と財産整理をやろう。

(翌日各自担当債務箇所の回収行為後に)

銭田:俺は債権を1軒も回収できなかった。

4人:1軒もダメとそういうことは考えられない、本当に回ったのか。

銭田:俺は単なるコンサルタントで回収は素人だ。

4人:具体的にどういう調子だったのか言ってみろ。

銭田:「回収するなら身分証を出せ、社長を連れてこい」と言われた。

4人:お前のような口八丁手八丁が丸でダメというのは信じられない。

灰原:本当はネコババしているのではないか。

銭田:失敬な発言だ、謝れ。

4人:いや怪しい、証拠をでっちあげているから手を抜いたのだろう。

銭田:言葉を慎め、信頼をなくしたら債権者委員会は回らないだろう。

4人:だったらまず潔白を示せ、本当に回ったか電話で確かめてみよう。

(電話で確認する)

4人:本当はどこも回っていないではないか。

銭田:すまん、実は急に病気になって行けなかった。

4人:そういう出まかし野郎の言う3億円の公正証書も嘘くさい。

銭田:公正証書を作成したお上を嘘呼ばわりして良いのか。

4人:おい社長、そもそも3億円も借りてなんで倒産なのだ。

社長:ええ、あのう、ローンや借入金の返済に……。

灰原:ならば通帳等で資金経路は証明できるはずだ。

(調べたらそういう流れはなかった)

瞑想録(その16)

4人: 公正証書が嘘くさい、社長とつるんでの取り込み詐欺だろう。

銭田: 公正証書はお上の証明だ、裁判所も否定できないぞ。

灰原: 公正証書偽造は重罪ですよ、良いのですか、警察に行きますよ。

銭田: このクソガキが、俺をなめると怖いぞ。

(結局灰原が、銭田のグルのヤーさんを通じて偽造を突き止め落着する)

さて、ここでの登場人物は闇金の銭田、認可町金融の灰原、ベテラン会社のディーラー4人ですが、銭田はもぐりらしく全部その場の出まかせで、これに対してディーラーたちがいちいち「何か嘘くさい」「不自然だ」と素朴に反応し、灰原が専門金融の立場から場面を進めて闇金を追い詰めていくという流れになっています。

さてここで文脈解析をするにあたって言葉を整理しておきます。「論理」という用語ですが、絶対的な論理は三段論法あるいは演繹証明法のような当たり前のものしかありません。ですからここで論理とは、「知識で整理されていて客観的に繋がりを説明できる手順」とします。それに対し「経験」は、「理屈なしに過去からの帰納であって直ちに言葉では説明できない手順」とします。

この仕訳で見ますと灰原の提案は理性的で、ほとんどが論理といえます。誰でも正誤を明確に判断できます。他方の銭田は論理以前の出まかせで、およそ納得できる要素がありません。そして残りのディーラー4人、この人たちは債権回収については素人なので話を引っ張ってもらう側です。それでも銭田と灰原の発言に対して、「不自然だ」とか「信じられない」とか主として経験レベルで反応しています。

ディーラーたちの反応は、銭田にはぐらかされるとそれ以上追及できないという意味で論理ベースとは言えません。ですが彼らの長い営業人生も決して無駄ではなく、現実には良いところをついています。トータルとしてディーラーたちの経験ベースでの問いを灰原が論理に翻訳して、さらに追及を進めていく形です。面白いのは本当に回ったかの電話確認で、ここだけ突然科学的手続きです。実生活における科学的手続きの存在感は、いつもこの程度です。

この漫画でのストーリー展開はもちろんフィクションです。でも我々の日々の現実の会話や会議の、きわめて良質の典型になっています。特に発言が多いディーラーたちの素朴な疑問を1つ1つ吟味してみると見えてくるように、我々の会話や会議での発言と納得はほとんどの場合、全くの論理でもなければ全くの経験でもない、割合はともかくこれらが混じったものになっています。これをここでは「経験論理」と呼びましょう。

人の納得は論理だけでも経験だけでも危なくて、これら両者が臨機応変に車の両輪になって進んでいくのが現実的です。ですから反応の形態が「不自然だ」とか「信じられない」であって、「合理的だ」とか「今まではなかった」ではないのです。一般に論理はデジタルで経験はアナログですが、現実にはこれらをうまく混ぜて塩梅して使っている訳です。この混合は、デジタルとアナログの対比を考えるとときにとても大切になるでしょう。

8、私も痴呆かもしれない

最近下流老人とか老人漂流とか老人破産といった、暗い話が随分と言われています。もちろん昔から貧乏なあるいは生活保護になる老人はい居ました。でも最近の下流老人の特徴は、現役時代にそれなりの会社を務めあげて貯金も年金もそれなりにあっておよそ従来なら安楽に寿命を全う出来たような老人が、「こんなはずではなかった」という本人もびっくりといった形で下流になり漂流し破産していくことです。

そんな「一寸先は闇」的なまさかの破産の主な理由は、病気と介護と養育だそうです。そのほかに詐欺もあります。病気自体はある程度保険で払えても要介護や寝たきりになった時には現実として「保険で全部大丈夫」というわけにはいかずに、貯金のなし崩しが続いていつの間にか貯金が底をつき家も売り破産に至るというわけです。どうしてこんな「まさか」の状態が起こったかという、その原因は本人(もしくは夫婦)の場合と親もしくは子(他人)の場合があります。

予想外の第1の理由は寿命が延びたこと、その分要介護の期間が予想外に伸びました。さらには医療の進歩もあります。昔なら「じいさまが畑に行ったきり帰ってこないの見に行ったら倒れていた」などという話はよくあって、遺族たちは「別れの言葉も言えずに突然逝っちゃってかわいそうな爺様」などと言って泣いたものです。でも今の医療技術なら、この程度の心肺停止なら結構蘇生できちゃう。ただ蘇生しても五体満足というわけにはいかない、その後何年も寝たきり生活に入る。今から考えれば昔の突然死の方がなんぼか幸せでした。

同じく寿命が延びたために発生した現象が老々介護で、引退した60代が90歳前後の爺さん婆さんの介護をする。ところが介護のご当人がもう体が弱り始めているので、結局は業者を頼むしかない。こうして頼んでいるうちにそれ自体は親孝行なのかもしれませんが、子供本人の老後の蓄えが食いつぶされているわけです。定年前に親が倒れて介護離職とかになるともっと悲惨です。再就職先はまずありません。親孝行も後先を冷静に考えてからほどほどにする時代になりました。

瞑想録(その16)

予想外の第2の理由は日本経済の老人化と言うか下降傾向です。そのために就職難や過酷労働や離婚で、成人した子供が転がり込んでくる。その子供たちに収入源などないですから、親が抱え込んで結局財産をすり潰すというケースです。そういった親たちが若いころは、皆さんモーレツサラリーマンで必死に働きました。それで稼いだ金がいつの間にか経済停滞のあおりを食って、子供たちに食い荒らされてしまうわけです。まあ世代間平均化と言えはそうとも言えますが、ちょっと荒っぽすぎます。

特に最近目立ってきたのが、40歳を過ぎてからの大会社社員のリストラや倒産による失職です。こういう人たちは子供もまだ中学生や高校生で親以外に頼るつてもなく、結局家族まとめて転がり込んでいるのではないのでしょうか。まさに経済失策の直撃弾の犠牲者です。ここまで行っちゃったらもはや、「貯金はいくら以上あれば安全だ」などという安全圏はありません。

こういった家族の見込み違いに比べれば、本人や連れ添いの思ったより長い病気や介護はまだある程度の覚悟はできていることでしょう。それにしても最近かなり話題になってきているのが痴ほう症です。痴ほう症は一度かかると治らないし軽くもならない、ただ進行するのみです。そして日常のほとんどのことができなくなります。さらに特徴として怒りやすくなるとか、徘徊し始めるといった面倒な症状が次々に出てきます。食事をしたのを忘れて何度でも食べようしたり、トイレで用を足したのを忘れて拭かずに出てきたりとか、そういうことが日常茶飯事です。妄想や暴言もあります。

そして痴ほう症の一番厄介な点は、本人の自覚がまるでないことです。自分が病気だという意識がないので、医者に連れて行こうとか入院させようとか介護施設に入れようとする、「自分は不当に陥れられている」と思い込んで激しく抵抗します。市の福祉課の人が来ても信じません。もっともこういう抵抗心を忘れた老人が振り込め詐欺にあうわけですから、ここは抵抗心があったほうが良いのかないほうが良いのか、難しいところです。ちなみに後見人制度ですが、もし弁護士等に頼むと結構安くないです。

この自覚症状のなさ、「私ほうそつきだ」というパラドックスは有名ですが、逆の「私は正直だ」型のパラドックスが現実化している状況です。自分が間違っていると思っても因縁をつけられていると思えて何の矛盾もない、「嘘つきが自分を正直だといってももう1つ余分に嘘をついたに過ぎない」という状況が現実として生起しているわけです。

今この文章を書いている私だって自分がまさか痴ほう症だとは夢にも思っていないし、「お前は痴ほう症だから措置入院させる」などと言われれば必死で抵抗するに決

瞑想録(その16)

まっています。でも先にも述べたように自覚のない痴ほう症患者は山ほどいるのですから、実は私も痴呆症で嫁様だと思っているのは女医で娘だと思っているのは看護婦かペットセラピーの猫で、周りが私の症状に合わせて演技してくれているだけかもしれないのです。文章を書ければ痴呆ではないでしょうが、文章を書いているのも単にそうしている気がしているだけかもしれません。そしてあなたもそうかもしれません。

介護施設の職員から聞いた話です。かつて大会社の重役だった痴ほう老人はもちろん威張ったり怒ったりしていますが、うまくコントロールするコツは「専務、決裁をお願いします」などと言って適当な紙束を渡すことだそうです。そうするとその元重役はその気になって、「よっしゃよっしゃ」と紙束をめくってはおとなしく座るそうです。哀れな末路です。

人生長生きするのとしないと、畑に倒れてそのまま逝っちゃう昔と生かされちゃう今と、どっちが幸せかわかりません。

9、心理戦(合理的推測)

たびたび漫画の「ナニワ金融道」からの引用で恐縮ですが、今回はマルチ商法の例です。上位の「総代理店」格にいる若造の枷木(かせぎ)が帝国金融の灰原(主人公)を自分の手下に取り込むために、格下の「卸問屋」の素占(もとじめ)やさらに格下の「小売店」格の欲田(よくだ)を伴って口説き落とそうとする場面です。以下のやり取りでカッコ内は、口外していない心の中(心理)です。

(タイヤのマルチで「大躍進会」なる説明会の場で)

枷木: このビジネスは無店舗商売で売って利潤を稼ぐものであり、ねずみ講ではないので法に触れるものではありません。

灰原: (それにしてもこの説明会の客たちのはしゃぎようは何だ、まるで新興宗教ではないか、不自然だ)

(場所を移して喫茶店で3人に取り囲まれて)

枷木: (灰原は金融屋だけあって切れるから、部下に組み込んでやるぞ)

素占、欲田: (こいつをものにできたら〇十万円入ってくる、追い込むぞ)

枷木: おいしい商売だ、私レベルだと電話だけで月100万円稼いでいる。

灰原: 税金もごっそりでしょう。

枷木: (くそ、油断できないぞ) 会社組織にして経費で落としている。

灰原: (やっぱり何か隠しているな) どうしてそんなに儲かるのですか。

枷木: 円高だ、一級品を定価の8割引で直接仕入している。

瞑想録(その16)

灰原：(さっき自動車工場のおやじに金をつかませたら二流品だと言っていたが、下端はそれも知らされていないな)

枷木：(こいつ、実は二流品だと気づいているな、攻め方を変えよう)要するに親族や友人関係を金に換えるビジネスなのですよ、金融業と同じでもっと儲かります。

素占、欲田：(俺たちもそんなことは聞いていなかったぞ)

灰原：(やっぱりマルチじゃないか)先日社友として試しにタイヤを注文した時の見返り金の領収書のあて名が素占さんと欲田さんの連盟になっていましたけど、そういうことだったのですか。

枷木：(こういう切れ者こそ部下に欲しいな)そんなことどうでも良いでしょう。金が欲しいなら入会しなさい。(基占や欲田、お前たちも追い込め)

素占、欲田：今こそ決心です、ぜひ入りましょう。実は私たちも警官ですがやっているのですよ、早くしないとチャンスを逃しますよ。(今日追い込まないと明日の返金ができないのだよ)

灰原：とりあえず話は分かりました。

枷木：やっと分かってくれたか、じゃあこの契約書にサインして。

灰原：とりあえず持ち帰って検討します。

枷木：(食えないやつだ、やっぱりだめか)

(次の日)

枷木：決心できましたか。

灰原：あなたこそその実力でいつまでもマルチの中締めをやっているのですか。独立開業しなさい、金は貸しますよ、もちろん担保は必要ですが。

まあほぼこういう流れです。マルチのプロの枷木と金融のプロの灰原が、それまでの経験をもとにお互いに相手を少ない情報から推測して読みつついわゆる心理戦を展開し、良い勝負ながら最終的に灰原が勝っています。この心理戦、脇役の素占や欲田の行動を見るとわかるように素人や生半可な根性なら参加しないほうがやけどをしなくて身のためです。

この心理戦を見ると分かるように各ステップでの心の動きは、それまでに培ったプロとしての専門知識を総動員して相手の本音を読み込んで、それに基づいて先手を打って相手のペースに乗らずに本音を引き出すための最短距離をたどっています。もちろん推測が入るので絶対ということはないのですが、あたかも碁の名人戦のように布石に無駄や隙がありません。

推測においては相手の言い分はもちろん、しぐさとか言い方とか目のやりようとかあるいは論理の飛躍の有り無し等と言ったあらゆる要素を考慮の中に取り込んで、五

瞑想録(その16)

感をフルに活用して行っています。一步間違えると相手の轍にはまってしまうので、真剣です。どちらも切り札をいくつか用意しているのですが、その切るタイミングや切るか否かの判断も非常に適切です。そういったやり取りの挙句に、より欲が深くかつ若造の枷木がはめられる側に回りました。ちなみに枷木は、ベテラン警官の素占や欲田も顎で使っていたほどのやり手です。

ただ勝ち負けは別として相手を説得するために次々に繰り出す提言、それらはおそらくは数段階の素の思考段階を瞬時に合算して、結果的には全く新規にかつ状況に即して進んでいます。上辺上は飛躍があるようで実は隙がありません。こう言った人の脳の働き具合の詳細、これを私はいつか詳らかにしなければならないと自分に課してライフワークとしています。

全般にマルチでも何でも人は何かを勧誘したり売りつけたりするときには、客に良い面ばかりを強調して都合の悪いことはダンマリかせいぜいアリバイ程度にしか言いません。私も最近某会社からクレジットカードを勧められたのですが、「〇〇の特典がありますよ」ばかりでした。企業が自分の得にならないことを勧めるわけがないのにその「落とし穴」をどうしても白状しないので、これは危険だと思い断りました。

私のような素人は、このくらい臆病で良いと思っています。同じ理由で株もやりません。その点この話の主人公の灰原さんはあえて虎穴に飛び込んでおり、私よりはるかに人生の達人だといえます。

10、山中先生の功罪

山中伸弥先生、たった4つの遺伝子の調整で細胞を初期化して万能細胞にできるIPS技術を世界に先駆けて開発してノーベル医学生理学賞を授与された優れた研究者だ。IPS細胞の偉大なところは、それまでのES細胞による初期化の場合は元になる細胞(卵子)を破壊しないとできなかったところ、IPSの場合は例えば皮膚細胞とかからも作れることだ。

元になる卵子を壊すか壊さないか。卵子といっても女性が数百個も持っているものでそのうち数個をつぶしても不妊になるわけでもないし、たいして違わないだろうと我々は考える。ところが欧米キリスト教社会では受け取り方が全く異なるのだ。カトリックや保守的プロテスタントは厳格に、殺人(自殺を含む)や中絶はもちろんのこと避妊も神のご計画に反逆する悪魔的な大罪とみなしている。絶対神の領域を人が侵すことになるからだ。

実際今も米国は大統領選挙キャンペーンの真最中だが、避妊や中絶に対するポジションがその候補者のイメージにかなり決定的であって、めでたく選出されるのに極めて重要な要因である。この「絶対神が作り出した人を殺す」というイデオロギーの上に立てばES細胞も確率は低いとはいえ生まれる子供の可能性を奪っていることに当たり、技術よりも倫理として大問題になった。今私は子ブッシュ大統領の回顧録を読んでいるが、そこでもブッシュはES細胞について、わざわざ1章を立てて自分の決断を自己弁護している。

ES擁護派は主として難病者とその家族で、不幸にして障害を持った自分が治癒される可能性をES細胞に賭けていた。他方反対派は上記のような保守派で、聖書に則るとES技術はアウシュビッツにも匹敵する罪であると主張していた。そんな中であって当時ブッシュ大統領が提起した仲裁案は、「既にES化されて凍結保存されている細胞についての研究は認める、他方で新たに生きた卵子をES化することは禁止する」というものだった。どちらの側の主張にもそれなりの根拠がある以上は、政治としては妥協するしかない。

ちなみにこの手の「既にやっちゃったところだけ許す」というのは見方によっては「逃げ得」であって必ずしも公平とは言えないのだが、核不拡散条約も「すでに開発している国だけ認める」という同じ構造だ。どうも欧米キリスト教諸国にとってはこの辺が、何とか許せる落としどころであるらしい。逃げ勝ちがまだ「最善の悪」なのだ。さらにちなみに「聖書に基づくと神をも恐れぬ行為」という反対論は、ES細胞が初めてではない。半世紀ほど前に宇宙ロケットを打ち上げるときにもキリスト教保守派から、「バベルの塔以上の蛮行で神への反逆」とごうごうたる非難があった。

ブッシュ大統領の当時の妥協案についてもその後も政治的思惑すら絡んで、喧々諤々の議論になった。究極には「神とは何か、人とは何か」という根本的哲学にまでさかのぼった。その議論がブッシュ大統領の任期切れ直前に、パタッとやんだ。山中先生による殺さない、IPS技術の成功である。バチカンが早速に、「つらい選択から我々を解放してくれた夢の技術である」という大讃美のコメントを出した。このコメントにクリスチャンでない山中先生が喜んだのかは、聞こえてこない。

ところで非キリスト教国である日本でバチカンからこれだけの賛美の名誉に浴したのは、実は山中先生が初めてではない。女性の妊娠について安全日と危険日があることを示した、いわゆるオギノ式の荻野久作先生もその一人だ。バチカンによると、日を

選ぶことは避妊には当たらないという。そして荻野先生の場合もバチカンの都合など自分には無関係とばかりに関知せず、一生を田舎の町医者で過ごした。

そういうわけで「人とは何か」という応用倫理上きわめて重要な議論は図らずもブッシュ裁定を最後の公式提案として、いわば議論途中で流産した形となった。欧米キリスト教社会はめでたしめでたしというところだろうが、私はここで議論が打ち切られたことを非常に残念に思っている。その理由は「人とは何か」の議論がもっと進んでいたならば人の始まりである誕生だけでなく、人の終わりである死に方例えば尊厳死にまで議論が発展しただろうと思われるからである。

もし人の生まれ方が重要なら、同じ理由で人の死に方も等しく重要だろう。おりしも今医学の爆発的進歩によって要介護寿命が不当に伸びており、財政を圧迫するほどになっている。尊厳死を希望する老人も結構多い。だが応用倫理学者のこの面の取り組みは、どちらかというとしり込みである。彼らを無理やりにでも議論に引き込まないと、世界は早晩介護老人の山になってしまう。「若者の仕事のほとんどは介護士」という、非生産的な世界になってしまう。

もちろん議論が始まっても保守層は「尊厳死は自殺と同じだから反対」というだろうし推進派は「尊厳死は人に自然な選択権」と主張して、簡単には収まらないだろう。それでも停滞している今に比べれば格段の進歩のはずだ。それに世界レベルの議論になれば、キリスト教論理だけでは決まらなくなってくる。

自然を愛する多神教徒には別の見方があるだろうし、世論形成に影響力のあるユダヤ教も別のポジションがあるだろう。ユダヤ人は、「姉妹の骨髄移植のためにわざわざ子供を産んで、子供の骨髄型が合ったのでその子供から移植する」程に現実的である。キリスト教の現実から目を背けたイデオロギーの振り回しにも辟易とする。

山中先生の偉業をけなすつもりは毛頭ない。そこに何か悪い要因があるとすれば、それは歴史の側だろう。だが結果として安楽死についての真剣な議論が盛り上がりずに終わったのは、いかにも残念である。

11、本と文章

3か月ほど前に私は一連の記事で、種々の表現媒体の中で絵画が架空の世界を最も自由に描けるという意味で自由度が最上であると指摘した。ただそれと同時に、絵画は物語の経時展開を描くのが難しいので究極には漫画やアニメに行き着くだろうこ

瞑想録(その16)

とも指摘した。私の昔の趣味のウォーキングも、景色の入れ替わりを経時的に見ることが要因の一つであったように思う。

文字や文章もSF小説に典型的に見られるように、架空の世界がいくらでも描ける。それでも絵画を上としたのは例えば「怒りに震えた」とか「驚きのあまり声も出なかった」と書いたときに、それをより多くの言葉で詳しく書こうとも著者が感じた怒りや驚きには程遠いという不器用の欠点が気に入らなかったためである。怒りや驚きは岡本太郎の「芸術は爆発だ」的な絵で描いてもらうのが、一番リアルだ。

ところがそう結論付けて以来3か月の間にももちろん絵画もアニメも見はしたが、時間をかけて圧倒的な情報を得ていたのは文書による本からであるという自分に気づいた。これは一体どういうことだろう。もちろん字の方が絵よりも、数学的な意味での情報量が多いということは認める。1枚の絵よりも漫画の1ページよりも、文庫の1ページの方が読んで理解するのに遥かに時間がかかる。時間がかかるということは同時に面倒くさいという欠点も内包するのだが、それでも多くの気づきを本に頼ったこの夏であった。

本や文章の特徴は、きめ細かな情報提供とストーリー展開の精巧さにある。もちろんこれらの特徴は時系列的なあらゆるメディア、具体的には漫画にもアニメにもある。だが文章が一番細かいところや複雑な展開を描けることは、文学作品を漫画や映画にするとたいいていの場合細かい成り行きは省いて話を単純化しているという事実からも分かる。言い換えれば小説や文章はリアリティーを犠牲にして、論理や推移の細密性に特化したという特徴を持った表現媒体なのである。そしてしばしば人はことをより論理で理解する。

もちろんここで文章ほど細密にかつ絵画ほどリアルに、これらを同時に満たすような媒体があればそれが最高なのだ。だが残念なことに現人類は、そのような媒体を未だに有していない。だから結局は目的に応じて、不十分を承知の上で使い分けるしかないのだ。新人類や宇宙人にはもしかしたら、これらの条件をすべて充足できる媒体を持っているかもしれない。もしそうならば彼らから見た我々の文明は、我々がチンパンジーの文明を見るほどに幼稚であろう。

ところで先に「絵画は感情で文章は論理」だと言った。だがもし文章の可能性が狭い意味での論理でしかなかったら、世の中に存在する文章は三段論法や演繹法といった当たり前の論理しかないことになる。強いて広げても法律文書とかマニュアル類程度の、面白くもなんともないものだ。だが現実には世の中に山ほどの文学が存在して、

瞑想録(その16)

いちいち心を豊かにしてくれる。全くの創作のSFや伝奇物のようなものもあれば旅行記や伝記のように真実を記したものもあるが、いずれにしろ論理のように木で鼻をくったようなものでなく面白くかつ世界観を広げてくれる。

では文章から論理をはぎ取って「文法的に合ってさえいればなんでも小説か」と言うと、そういうこともない。「朝を食べたら本が光った」、こういう意味の取れないものはまず除外されるだろう。次いで「結局何も起こらなかったというわけさ」で終わるようなものは、意味が理解できても多分につまらないだろう。前半はスポコンものだったのに途中から突然妖怪物に代わって終わっても、読者はおよそついていけない。こう見ていくと価値ある小説には論理とまではいかないものの、それに準ずる一定の法則や枠組みがあると言うべきだろう。

そしてその法則とはいわば、体験に基づいた蓋然推移である。「こういう展開はあるいはありうる」という感得により、人は小説の内容と展開を理解したと感じて納得してさらに前に進むのだ。脳内にある拡大された自己の応用投影、あるいは広い意味での写像と言っても良いだろう。但し全くの既知体験のみが根拠では、その作品に何の新規性もなく世界観も広がらず面白くもなんともない。つまり、拡大しうる蓋然推移の枠内ぎりぎりまで意外さを出すのが、小説家としての才能なのである。良くあるパターンだが「被害者が実は真犯人だった」、こういった意外さをいかに当業者の常識のギリギリ内側で展開するかということである。

逆説的だがもう一つ、小説に必要な要素は遊びだ。例えば探偵小説で「もしかしてと推理してやってみたけど結局実りはなかった」、こういう場面はよく読者に「この部分はまとめて要らないのではないの」と批判される。だが小説は教科書でも法文集でもない。ちょっとした脇道へのそれ、これがなぜか話を多様にし、かつ読者の息抜きにもなるのだ。こういう遊びの部分を持つということは小説が最小作用の原理に従っていないということになるが、人の心は物理ではないのだから当然だろう。

まとめると文章や小説の本領は、景色や模様とか主人公たちの人間模様や環境とのかかわりやそれらすべての織りなしや絡みや展開や落ちにある。そしてその文章が理解されるのは、人の常識という蓋然法則に則りながらもその枠を拡大するような迫力の存在であるということになる。「論理」という用語をこう言った世界にまで拡大して用いれば、あるいは論理学にも当たり前を超えた新たな展開はあるのではないか。

12、未来は暗いか明るい

瞑想録(その16)

今、対照的な2冊の本を読み終わった。すなわち、

- ・「下流老人」(藤田孝典)
- ・「ニートが開く幸福社会ニッポン」(二神能基)

の2冊である。

前者は老人介護福祉の立場から、最近の老人が「こんなはずじゃなかった破産」や「こんなはずじゃなかった漂流」と言った下層民に転落していく構造を分析したものだ。そしてその結論をもとに将来について、「今現役の若者たちは上位一握りを除いて全員下層老人決定」と暗い警鐘を鳴らしている。

最近の若者の年収は年功序列もなく正社員も少ないために毎年減少しており、そのことは実際に厚労省の統計に定量的に示されている。同じ統計には、若い人ほど将来の老後の生活特に資金や年金について不安な人の割合が増加していることも示されている。

他方後者はニートや引きこもり支援の立場から、引きこもりにはいじめとかシカトとかがあるがこれは多分にきっかけであって、その本質は20世紀型の頑張り親と21世紀型のゆとり子供との価値観の衝突にあると指摘する。そしてひきこもる子に限って出世とか金儲けとか繁栄等は無縁な現代の本質を感じ取る敏感さを持っており、親から切り離してその価値観を肯定してやると心根の優しい素晴らしい若者に素直に育っていくという。

そしてその自我が肯定されて21世紀型低欲望社会のけん引役になった元ニートたちは、ほどほどの人生を自ら選んでいく。仮に派遣社員で低所得でも家庭を愛する人生の楽しみ方を知った新人類として独立し、たとえ貧しくても気の合った同士で結婚していくそうだ。そして著者はこれからの日本のあり方について、むしろ彼らに教えられることの方が多いという。

さて徹底して悲観的な前者と徹底して楽観的な後者は、多分に同じ世代や同じ人類を観察しているがその解釈と見通しは正反対である。一体どちらが本当なのであろうか。もちろん2人の著者の専門はそれぞれ異なっているために切り口の違いは大きいのだが、それにしても見通しは真逆だ。後者の通りに結婚した非正規夫婦は、仮に今は幸せだとしても半世紀後の老後はどうなっているのだろう。

まず前者について一つ言いたい。著者はしきりに「頼れる親せきや友人」の存在を重要視している。昔は大家族で支えあっていたのが今は核家族化したことが下流老人

瞑想録(その16)

増加の一因であり、現代人は頼れる親せきや友人を確保することが大事だと訴えている。ここで「頼りあう」の中には精神的な要素、励ましとか語らいとか情報とかも含まれてはいようが、現実的には介護等の労務支援や金銭支援である。

つまり彼の奨励は助けられる側に回れば都合の良い結構なものだが、助ける側に回ってしまうとこれは多大な損失をこうむることになる。しかも「助けるか助けられるか」は、なってみないと分からない賭博のようなものだ。このような論理は私に言わせれば全くの破たんであり、結局は誰かが必ず不幸になる悪魔のシステムだ。

他方後者は建前論を一切抜きにして現状の分析と提案に徹している。特に著者はもう70歳に近くその意味で年齢的には20世紀側に属するが、40代50代を無職で自由にぶらぶらしていた経験を持つ自称「元祖ニート」で、マインド的には21世紀のおっとり型人間を理解できる経歴を持つ。

そして元同期を観察すると、頑張った挙句に定年退職して今は金だけあって所属も趣味もない奴ばかりと言う。無意味に同級会をたくさん開くとか大名旅行に金をつぎ込んでそれでも満たされない彼らを、「自業自得で救いようがない」と切り捨てている。こういう終わった連中が終わったガンバリズムを子供に押し付けることが、一言で言って引きこもりの元凶なのだ。

結局この2冊を私なりに総合してみると、「今の若者は基本的に金も仕事もないがだからと言って直ちに不幸なわけではない」ことになる。ことさらに「老後に不安はありますか」と聞かれれば「ある」方に○をつけるであろうが、その実20世紀の親が考えているような深刻な思いがあるわけではない。そんなことより今日この日々を楽しく、つまりそれなりに仕事をして定時に帰り仲間を呼んで鍋パーティーをすとかスマホのSNSで仲間と緩く付き合っていればそれで満足なのだ。むしろ若いのに出世欲で頑張っている今は少数の同級生の奴らが、「バカみたいな現代の化石」に見えている。

中には上司の覚え目出度く正社員登用の声がかかっても、責任なく自由に生きたいと断る人まで普通に居るという。確かに日本の歴史を通して見るならば、20世紀おやじのような滅私奉公的ガンバリズムが推奨された時代はわずか3回しかなかった。すなわち明治27年の日清戦争時、37年の日露戦争時、そして戦後の数十年である。すべて20世紀で完全に終わった。それ以外の時代の日本人は勤勉ではあったがそれは強制されるとか国家による集団的マインドコントロールでなく、あくまでも自発的なものであった。

瞑想録(その16)

この観点から見ると今のアベノミクスは「4回目のガンバリズムの奨励」という時代錯誤に見えてくる。評論家の大前研一さんも、「現代が低欲望社会であるということを正面から見ないあらゆる政策は失敗が約束されている」という。半世紀前には「3C」と言って、車、クーラー、カラーTVが羨望の的だったが、今は必需品としてのエアコン以外誰も欲しがらない。また私が若いころ女の子とデートするには車を持っていたスキーとテニスができることが必須だったが、今はこんなものには誰も振り向かない。むしろ著名なフリーゲームの攻略法に詳しい方がよほどの武器になる。

こう見てくると日本の未来はこの2人の正反対の著書の、その合わさったところに程よくソフトランディングするのではないかとも思えてくる。

13、夢と解釈(その7)

<夢1>ある日私が会社に行ってみると、私が末席になっていて若い人たちが上席になっている。どうやら社内改革があったようだ。そのうちに先輩社員や同僚たちがぞろぞろと、退職や転籍の挨拶にやってきた。中にはかつて私に「女を紹介しろ」と迫った先輩社員もいる。どうも私は末席といえどもリストラからは外れたようだ。

<解釈1>会社というところも、かなりやくざなムラ社会でした。

<夢2>嫁様が車をバックで車庫入れしようとして、歩行人夫婦と接触してしまった。当然にその歩行人たちは怒ってきて、私がひたすら謝っている。そこで女性の方がなよなよと倒れた。私が焦って抱き上げると、その女性は顔色が悪い。どうも事故のせいではなくて、白血病の末期のようだ。私が彼女を必死で励ますと、男性の方も私に感涙して感謝し始める。

<解釈2>この夢もかなり飛んでいて、いくつかのエピソードを強引にくっつけた感じです。

<夢3>頭の毛を徐々に刈られてしまい丸坊主になる夢を、一晩中見ていた。何度刈ってもまた刈られるのだ。

<解釈3>こういうのって多分、かなり陰湿ないじめの記憶ですね。

<夢4>娘を連れて幼稚園の入園面接に行っている。知らないおばさんたちが沢山居た。そのうちの1人が、「娘の体調が悪いので医務室に連れて行ってくれ」と言う。私は係りの者でないと断ったが、どうしても連れて行けと言うので連れて行った。医務室には地味そうな、見たことのあるおばさん医者がいた。後で考えたら林文子横浜市

瞑想録(その16)

長だった。そしてそのおばさん医者が「私は東洋医学なので触診と全体観で診察する」と言って、私に抱き着いてあちこち揉み始めた。私は気色が悪くなって逃げ出た。

＜解釈4＞何かドタバタしていますが、私は別に婆さん趣味とかそういう変態趣味はないのですよね。

＜夢5＞部員全員で遠泳に出た。ところがなぜか、私一人だけ泳いでいる。そして全員無事に着いた。目的地の浜では、みんなでバーベキューなどをやっている。私一人だけまた気が向いて、近くの小島にもうひと泳ぎしてみた。そして小島から帰ろうとすると、海が逆巻いている。何とか元の島に戻ると、皆が車で戻る準備をしている。私も帰ろうと準備するが、私の衣類一式がどうしても見つからない。

＜解釈5＞私は別に泳ぎが得意でもなければ泳ぎたいわけでもないのに、どんな意識が浮上したのか見当もつきません。ただ、置いてきぼりの焦りはいつもありますね。

＜夢6＞何か香りがするが、どうしても思い出せない。夢の中で必死に瞑想する。しばらくして湖のほとりの薬局が見えてきた。店名は屋久座(やくざ)薬局あるいは八久座薬局と読める。さらに瞑想を続けると香りがより身近に感じられてきた。どうやらバニラを主体にしてこれを蠟で固めた香料のようだ。

＜解釈6＞香料を売っているのって、そもそも薬局じゃなくて化粧品屋ですよね。夢の中でも瞑想するところが自分らしいと思います。その瞑想のおかげか、この日は寝ても疲れが取れていませんでした。やくざは怖いです。

＜夢7＞とある中央研究所を訪問すると、管理エリアだということと特別区域に通された。トンネルを掘った地下空間に、数千台の計算機が並んで稼働している。シミュレーションの最中で、オートマトンが衝突したり捕食されたり分裂するとチンという音を出す。ちょうどシンチレータのようだ。それがさっきからひっきりなしに鳴っていて私には暗騒音のようだが、研究員たちは「素晴らしいメロディだ」という。そして「心を澄ませば真実が聞こえてくるのだ」ともいう。

＜解釈7＞昔に「タイムトンネル」という米国のテレビ番組がありましたよね。あれっぽかったです。

＜夢8＞親戚の家に行ったところ、庭の向こうに何軒か家が並んでいる。興味がわいてきて周りをうろつき、ついにこっそり他人の家の中にまで入ってしまった。地図によるとその親せきの家は駅のすぐ裏手にあるのだが、どうしても駅までたどり着けない。

＜解釈8＞宇宙の真実が一番大事なことがまだ明かされていなくて、しかもそれは意外と近くにあるがなかなか見出すきっかけがないという普段の確信が、夢に現れているように思います。

瞑想録(その16)

＜夢9＞私は石川圭三という名のアナウンサーだった。仕事で軽トラに乗って狭い道を行った。道の両側はネギとショウガの寄せ植えが作られていたが、道が狭くて車の向きを変えられない。周囲を見ると街路樹の枝が変に切りそろえてある。「5681-431がキーナンバーだ」という声が聞こえた。

＜解釈9＞キーナンバーなど分かりませんが、世の中思い通りにいかないことが多いという夢だと思いました。

＜夢10＞近所の喫茶店に行くと、隣のマンションに住んでいるきれいなお姉さんがすでに座っていた。そこで一緒にお茶を飲んで名前とメールアドレスを交換し、お茶代をまとめて払って颯爽と店を出た。気持ちよくなってよく考えてみたら、先日もその隣のマンションの別のお姉さんと同じことをしていた。

＜解釈10＞本人はとてもそんな派手なことができるような器用な人間ではないのですが、実は一度くらい格好をつけてみたいのですかね。

14、お迎えさんイラッシャーイ！

桂文枝による「新婚さんイラッシャーイ！」という長寿番組がある。新婚ほやほやのカップルが出てきて、そのなれそめから現在の状態までを文枝の話術に乗せられて面白おかしく話してもらう、基本的に素人をいび〜ルお笑い番組だ。まあ、今は結構多い「素人もの」の先駆けとも言えるだろうか。

世の中目出度いこととか人生の節目と言え、誕生、就職、結婚、この3つだろう。誕生については半世紀ほど前に、「こんにちは赤ちゃん」という歌が梓みちよの歌唱で大ヒットした。就職は最近ブラックが多いためか、あまり芸能ネタにならない。そこに行くと結婚はそうはいっても男女が一緒になって子作りまで行くので、結構いびり甲斐と笑いどころが満載である。もっとも最近文枝がチョンボをしたおかげで、「愛人さんイラッシャーイ！」などと揶揄されているが。

西暦2100年、日本人の寿命はさらに延びたが出生率は低空飛行を保ったままで、ついに「3人に1人は要介護」と言う状態になってしまった。介護は幼児保育と同様に個人差がある上に一人一人に手間がかかるので、1人の介護士が世話をできる老人は3人程度である。その結果、若者はもちろん労働可能者のほぼ全員が介護職に就かないと介護が回らないという事態になってしまった。

瞑想録(その16)

右を見ても左を見ても、隣3軒両隣みんな介護職なのだ。介護職と言うと老人を大事にする、あるいは儒教的に親孝行な職業に見えるかもしれない。だがもはや訳も分からなくなって飯だけ食べている老人の下世話とか愚痴の相手とか、希望とか生産性とかそういった前向きの要素がまるでない職業である。よほど新興宗教に洗脳されていない限り、やり甲斐などということは望めない。かといって手を抜くと虐待だとか言われるので、介護職は板挟みの職業になっていた。

そしてそこまで大事に介護される老人も、丁寧に扱ってもらって幸せかというとなんかそんなことを感じるのはごくわずかだ。口を開けば不平不満ばかり、やれ体が動かないだの面白いことができないだの。いやそんな老人はまだましな方で、大半の老人は自分の名前すら言えなくなっていたりする。変に疑り深くなるとか妄想に明け暮れる老人たちも多い。こういう現実をもう一度孔子様に見てもらいたいものだ。

もちろんこうなるまで政府が無策だったわけではない。尊厳死や安楽死が容認されるようになった。これは倫理としては偉大な進歩であったが、実際は安楽死の判断にかかるような寝たきり老人よりも、ほとんど寝たきりつまり呼びかけると「うう」などと反応くらいはする程度の寝たきり老人の方が多い。そしてこの程度でも意識があれば、安楽死させると殺人になってしまうのだ。

出生率を増やすような諸施策も試された。だが生涯賃金は低くなるし終身雇用は消滅していつ生活保護になるかわからない等で生活不安はさらに増大して、結局子供を産んで育てるようなマインドは醸成されなかった。子作りも株式投資等の景気と同様に理屈でもなく数字でもなく心理、マインドの問題なのだ。

この夢のない内にこもった閉鎖社会はどこか、場末の寂れた商店街に似ている。まあどこも似たり寄ったりだろうが例えば高円寺駅前商店街、「高円寺純情商店街」などというヒット作品も出た。でも実態は例えば、中華屋は八百屋から野菜を買い、八百屋は中華屋からその野菜を料理した出前を取るといようなほとんど内輪の取引のみの非生産的な存在だった。商店街が全部まとめて一瞬で消えても、ほとんどだれも困らない。

今それとほとんど同じことを国単位で行っているのが、22世紀初頭の日本なのである。そこの人々が心の中でひそかに願うのは「当たり」、つまり脳溢血や心筋梗塞で老人たちが半端なく寝たきりになって安楽死することだった。老人当人はもちろん、介護者も自分の担当がそうなることを願っていた。中でも最も目出度いのが「大当たり」で、これは一発で半端なく昇天してしまうことだ。「隣の爺さんは大当たりになってうら

瞑想録(その16)

やましい、俺もあやかって大当たりしたいものだ」などを使う。いわゆる「お迎え」が直ちにやってくる、これよりうれしことはない。

ついにTVでも、「お迎えさんイラッシャーイ！」などという番組が始まった。3代目桂文枝が大当たりを見送った家族を迎えて尾頭付きの鯛などで寿ぎつつ、大当たりで送るコツやお迎えさんに調子よく来て頂くコツなどを語ってもらうのだ。そしてこの番組に「けしからん」などという批判もなく、国民的長寿番組のサザエさんよりもはるかに高い視聴率を稼ぎ、有名会社がスポンサーに就くというありさまになった・・・。

「お迎えさんイラッシャーイ!」、以上の話は科学ショートSFの神様と言われた星新一先生の文体を見習って不詳私がこしらえた日本の未来予測SFだったのですが、楽しんで頂けましたでしょうか。暗い気持ちになった・・・、ということは私の文才も捨てたものではないということですね。お褒めの言葉をありがとうございました。

15、16年ノーベル賞総括

今年も10月になってノーベル賞の季節がやってきた。もう何年も待ち続けてやきもきしている、エライセンセーたちも多いことだろう。毎年「事前予測」に載った人はもらえない」と言うジンクスがあるが、ふたを開けてみると今年の1番の意外な結果はやはりボブ・ディランのノーベル文学賞受賞(受諾の返事はまだ)であろう。

この受賞をまともに予測できた人は、本人も含めて世界中に誰もいなかったのではないか。まじめに純文学に命をかけている多数の作家からは、「ふざけるのもいい加減にしろ」と言う怨嗟の声が聞こえてくる。あたかも会社の方針に従順に滅私奉公と隠忍自重を重ねてきた社員が、突然いい加減な不良の同期とか外からのヘッドハントが突然社長になられて、「バカバカしすぎてもうやっていられないよ」などと居酒屋で管を巻くようなものだ。

他方で「来年のノーベル文学賞は吉田拓郎で決まり！」などと言う、まじめなのか茶化しているのか分からないような「予言」も出ている。たしかに一般論としては大衆演芸であるフォークの歌手のボブ・ディランがもらえるなら、吉田拓郎だってそのスコープに入てこよう。つまり今回のディランの受賞は、それほどに今までのノーベル賞のイメージを変えるものだった。

それ以前は文学と言うと、「字ばかりで約200ページで中に不条理とか平和の願いなどがちりばめられたもの」と言う固定観念があった。今回のディラン受賞は見事にそ

の固定観念を打ち壊して、文学という枠を大きく広げている。これは文学の外にいるものから見ても、かなり大胆な思想改変だ。吉田拓郎どころか、小沢一郎やオール巨人だってアリだということになる。

ところでノーベル賞の意義とは何だろうか。従来路線に乗ってその延長上にちょっと変化をつけ、哲学でもちょっと入れて香水を振りかけた物の内より売れた順に授賞していたとしたらどうだろう。その受賞は順当ではあろうが、その賞の価値は墓守人ほどつまらないと言えないだろうか。むしろ逆に固定観念を壊して全く新奇な創作活動に動機とチャンスを与え文化活動を能動的に誘導してこそ、立派な価値ある賞と言えるのではないか。つまり議論が渦巻くほどで初めて権威ある賞となるのであり、単に予想の追従ならそんな賞は無くてもよいのだ。

この観点からは今回のボブ・ディランは、まさにノーベル賞の面目躍如と言って良い。先に会社の仮面的従順社員の例を挙げたが、たとえ利益優先の会社だってそういうやつは体よく使い捨てで大して偉くなれない。であるならば創造の場である文化や文学は、なおさらそうだろう。狙っている奴が取るように、その賞はもうおしまいだ。

日本の各種文学賞を見ても、マンネリ化しないような工夫は随時なされてきた。例えば40年前に村上龍が「限りなく透明に近いブルー」で芥川書を取った時には、審査委員の一人であった江藤淳が「これのどこが文学だ」と激怒して辞任しそうになったほどだ。また数年前には文学界新人賞を、日本語を母国語としないイラン人の女性に与えている。賞の存在意義はむしろこうした、新機軸の提案にあると言って良い。

こういった文化けん引の立場から、今年の他のノーベル賞を見てみよう。医学生理学賞は、日本の大隈良典先生がオートファジーで受賞した。オートファジーとは何らかの刺激あるいは生体全体の必要性から、細胞が自分を溶かして食ってしまうという一種の自食あるいは細胞の自殺のことである。大隈先生が注目するまでは、誰もそんな現象があるなどとは思ってもいなかった。この発見の応用先としてはがん治療等があるそうだが、先生はこの研究を始めたきっかけとして「単に面白かったから」と言っている。

最近世界的な経済低迷や実験装置の大型化から、「役に立つ研究」や「金になる研究」と言うことがしきりに言われて半ば常識化していた。10年ほど前に野依良治先生が不斉反応でノーベル化学賞を取った時にも、その技術の応用範囲の広さや取得特許の多さが評価されたと言われた。4年前に医学生理学賞を取った山中伸弥先生も

瞑想録(その16)

研究の動機として、「より多くの難病患者を救いたいため」と言っていた。だが今年の大隈先生は「単に面白かったから」であって、役に立つかには無頓着だ。

ノーベル化学賞は要するに、鎖のように多重に絡まる分子を多数合成した成果について与えられた。要するに知恵の輪みたいな分子である。この技術の応用としては分子スイッチ等多数あるといわれているが、まだ実用化されたわけでもない。そして今回の先生方がこれらの分子を作った理由も、「単に面白そうだったから」である。

ノーベル物理学賞は、スピン量子渦のトポロジカル相転移に対して与えられた。渦は簡単に言えば通常は右回りと左回りが対になってできるのだが、一定条件を満たすとこれらの渦が対を離れて乱雑化(モノポール)になるという相転移現象である。これも新規記憶媒体や量子コンピューターに応用があるというがまだ実現されておらず、ここでも研究のきっかけは「単に数学的直観に寄っただけ」だそうだ。

これらの例を見てわかるようにノーベル賞の授賞にも一定の傾向の波があって、今年の授賞方針はどうも、「今までの狭い固定観念を破ること」と言えるのではないかと思われる。基礎研究が軽視される風潮を憂いて一見役に立たない基礎研究こそ知恵と応用の実は泉であると示し、一見文学でない書き物に対してこれも文学なのだよと率先して新時代を促しているのだ。

だから特にボブ・ディランについて言えば、彼が多分に象徴的なのである。なぜ同時代のビートルズではなかったのかと聞かれればビートルズでも良かったのだろうが、とりあえず文学領域の拡大をボブ・ディランで象徴させたのである。そして象徴は1回やれば十分だから、冒頭の警句に反して吉田拓郎が来年授賞する可能性はむしろ消えたのだ。

ノーベル賞はさすがに「賞の中の賞」として、今年も賞の在り方について率先垂範したと言える。

16、ある米国人の言い分

かつて日本にきて少し経った米国人の知り合いが、「日本のシステムは遅れていてまるで未開人並みだ」と憤慨していた。彼の指摘する未開の例は交通システムで、その具体的指摘とは①山手線内に戸建て住宅があるのはおかしい、②電車を乗り換えなのに運用会社が違うだけで再度基本料金が取られるのはおかしい、③トランスファ

瞑想録(その16)

一(一定時間内ならバスなど乗り継ぎ自由)システムがないのはおかしい、の3つだった。

第一点は、山手線内の特に戸建て住宅を法律によって全部どかしてビートル群に集約すれば、サラリーマンが毎朝1時間以上も満員電車で揺られて疲弊する愚がすべて解決するという主張だ。第二点は、例えば地下鉄への乗り入れ線などで乗り入れたとたん運賃が倍近くになるのは距離比例という利便対費用公平の原則に反する「インチキ取り」だという指摘だ。そして第三点目は、例えばどこかでバスを乗り換えた時にまた料金を払いなおすのは、運賃がバスのたまたまの路線設定に大きく左右されていて地域均質性に反するという主張である。

まあ指摘されればごもっともで、確かに我々日本人がいつの間にか飼いならされて常識だと思い込んでいる面もあるので反論しないでいた。するとその米国人はさらに続けて、①日本国民やサラリーマンはなぜ文句や反対運動を始めないのか、②今お前は暗黙に賛同したのだからお前が反対運動を組織しろ、とまくし立てた。そしてしばらくして再度その米国人に会うと、①反対運動がちっとも聞こえてこないがどういことだ、②賛同して実行しないお前はうそつきか腰抜けだからもう友人でない、と啖呵を切った。この米国人はこうして段々と上司面をして命令口調になっていった。

ところがこの程度で驚いていたら、ユダヤ人などその比でない。ある時ユダヤ人の友人を連れて旅行に行った。その際駅近くで荷物を預けようすると、担当者が衣類の荷物を預かれるように押しつぶしたら紙袋が破れてしまった。担当者が「この荷物は預かれる状態でない」と突き返すと、そのユダヤ人はかんかんに怒って「あの担当者が袋を破ったのだから弁償させろ」と言って譲らない。そのあと有名な寺に連れて行くと、そこは良くあるように内部撮影禁止だった。禁止の理由に「仏像保護のため」とあるとそのユダヤ人は、「これは嘘で写真帳を買わせただけだ」と言って勝手に写真を撮りまくった。さらにそのあと地元の祭りに連れて行くと神輿に乗ろうとするので係りの人が「危険だから」と禁止すると、「お前は俺がこの神輿を壊すと思っているのだろう」と言って勝手に乗って私に記念写真を取れと指示した。

米国は特に富裕層にユダヤ人が多くニューヨークはジューヨークと揶揄されているほどで、当然に文化的影響を受けている。先の平均的米国人の主張にも、何気にユダヤ人起源の自己正当化や我田引水の痕跡が感じられる。ユダヤ人の聖典(キリスト教の旧約聖書)の例えば予言の諸書(ネビイム)を見ると「自分たちの罪の自覚」が強調されている。だがユダヤ人の2千年に及ぶ放浪と迫害の歴史はユダヤ人をして、預

言者の言葉よりもイスラエルの父であるヤコブの「兄エサウを謀略により長子の権利を奪う」場面の方によほど目が行くらしい。

この一神教に特有の傲慢さ、「自分こそは絶対正義の神の僕だ」という意識はユダヤ教やキリスト教のみでなくイスラム教にもある。ジハード(聖戦)に参加して異教徒をせん滅するのは、殺人ではなく神への供え物で絶対善なのだ。ところが善とか美とか正義とかは決してこれほどに簡単でないことは、紀元前5世紀にソクラテスがすでに論じているところである。

何年か前に「サンデル先生の白熱教室」というシリーズが流行って、その中に「正義の部」もある。この先生の授業の仕方も、行為は常に多面的であって正義とか善とかは一概には言えないことに注目したものだ。ことさらにそういう具体例ばかりを挙げることにより、生徒に議論の練習をさせるという形だった。まあサンデル先生の方が頭の固い一神教徒よりは、多少は頭が柔らかかったようである。その概要は下記のサイトに集約されている、

http://www.visualecture.com/wordpress/?page_id=3139

私は白熱とか頑張りとか言った言葉が嫌いなのでサンデル先生も尊敬していないが、サンデル先生と同様のもっとわかりやすい例を挙げよう。

＜格闘技で相手がけがをしているときに、そこをことさらに狙わずに負けるのと、ことさらに狙って勝つのとどちらが正義か＞＜特にそれがオリンピックだったらどうか＞＜それが共産主義だったらどうか＞。先生のどの設定も基本的にこのパターンである。そして時には、「シャイロックは正義だ」と強弁することにより自分のディベート技術の高さを誇示する生徒まで出てくる。

先の頭の固い標準的外国人の論理に従えば、人は神に万物を支配する権能を与えられているのだから、最も効率的に利用することこそ正義だということになる。この理屈で、「牛は食べるために飼育されているのでステーキは食ってもよいがクジラは自然を満喫するために生まれてきたので食ってはいけない」というのが揺るがない正義になる。同じ理屈で、「未開の土人は支配されるために生まれてきたのだから植民地にして使役するのも揺るがない正義だ」ということになる。そして冒頭の米国人の交通システムに対する文句も、これらに通底していないか。サンデル先生には牛とクジラの正義こそ議論してもらいたいものだ。

「そちらが先に約束を破った」という形を意図的に作って堂々と100倍返しするのも正義で、真珠湾がこの典型だ。また不幸な子を救うためと称して養子縁組が変に正義で

瞑想録(その16)

あると称揚されるのも、彼らに特有の人工物を自然に優先し慈善をご印籠に反論を許さない心の不自然さの反映である。ある米国人は「男の子が欲しかったが生まれてみないと分からないので男の子の養子を取った」と、さも自慢げに話していた。

我々日本人や広く東洋人はアニミズムの土壌に生きている。だからたとえそれが形式的に善であろうと正義であろうと合理であろうと、絶対であるとしてパターン化したとたんにイデオロギーとなって現実と乖離する愚かさを知っている。通勤時間は短い方がよいが、山手線内がすべてオフィスビートルになるのも興ざめだ。

問題はすべて解決すべきだと信じて疑わないのが欧米キリスト教徒、それに対して問題も時には味わうことを知っているのが東洋的アニミズムである。両者は相いれないし後者の方がより高い。

17、失われた20年

今ちょうど3冊の本を同時に読み終えたところだ。すなわち、

- ・「失われた20年を超えて」(福田慎一、15年)
- ・「ブラック企業とモンスター消費者」(今野晴貴他、14年)
- ・「高学歴ワーキングプア」(水月正道、07年)

の3冊である。

「失われた…」は、専門の経済学者による解説書で、90年前後のバブルより説き起こして、その後の失われた20年を前10年(90年代)と後10年(00年代)に分けてそれぞれの特徴を端的にまとめている。

要点は、①バブルの原因は投資者の根拠のない過剰期待である、②前10年はバブル処理が相変わらず護送船団だった為に遅れたが海外のいわゆるハゲタカファンドだけが黒船として有効に機能した、③後の10年はいわゆる小泉改革で国内からも自主的改革が始まったがリーマンショックや世界同時不況さらには新興国の追い上げ等あり国全体の財政向上には限界があった、としている。

「ブラック…モンスター」は、ブラック企業追及で有名になったNPOのPOSSE運営者による解説書である。①企業の自主性のなさ、②日本全体の景気後退、③労働運動と消費者運動のかい離、それに④日本人特有のおもてなし精神がまとめて悪い方に働いて、ブラック企業とモンスター消費者を作ったという分析である。対策としてはひたすら欧米型の、契約で職務範囲を明示する労働形態の導入を勧めている。

「高学歴・・・」は、90年代初頭の大学改革の具体的には大学院の強化と博士増産が、単に子弟減少に対する文部省の利権拡大として行われたのが悲劇の始まりとする。そのために博士たちの就職先がなく失業博士やアルバイト博士やフリーター博士を増産して、日本の資源トータルとしての無駄遣いになっていると主張する。そしてこの無駄は一部エリート大の純正博士(他大学から院試で編入した者でない「本来の」博士)を除いて、蔓延して絶望的状况にありそのまま下流中年になってという。

私がこの3冊を同時に呼んだのは多分にたまたまであった。だが読後感としてはどうもこれらの問題が相互に関連しあっている、あるいはもっと根本のところの共通原因に発しているように思われた。もちろん個々の本にそのようなことをにおわすような記述はないが、この時代を生きた一人の実感としてそう思わせるのだ。第一タイミングがそろいすぎている。まあ大きく言えば、グローバル化する世界とそれについていけない日本の構造的かい離の犠牲者という形である。

先ず「失われた・・・」と「ブラック・・・モンスター」を並べてみよう。ブラックやモンスターが社会問題化したのはちょうど失われた「後の10年」と重なる。日本がそれまでのなれ合いを反省して規制撤廃と経済改革に取り組んだ、そのこと自体は遅すぎたとはいえ評価できる。だが結局会社が昔の人間関係では運営できなくなって、ドライに利潤を追求せざるを得なくなった。利潤が直ちにでなければ則倒産で退場であり、必然的に経営者も目先の利益に躍起となる。目先の利益を上げるとは、コストを下げるかたくさん売るかのどちらかだ。

ここでコストを下げる手っ取り早い手は、人件費の圧縮と社員圧迫による生産率向上である。そしてたくさん売るとは、他社より1円でも安くして付加サービスを厚くすることだ。これは直ちに企業のブラック化と消費者のモンスター化に同時に道を開く。ただここでややこしいのは、我々一般庶民は会社では社員であり同時に商店では消費者だということだ。

一人二役をやっていて、まわりまわって結局自分の首を絞めている形となっている。一言でいえば、「ブラックをされた奴がモンスターになって憂さ晴らしをする」、あるいは「ブラックとモンスターの板挟みになって死ぬのが正社員の役割だ」というわけだ。

ブラックとモンスターを並べることに、ほとんどの人は違和感を持っていない。実はブラック企業の反対はブラック労働者であり、モンスター消費者の反対はモンスター商店であるべきなのだ。これらが素直に繋がってこないという非対称がそもそもおかし

瞑想録(その16)

い。この根本には物があふれていて商品買い手市場であり、同時に労働者も余っていて労働買い手市場であるという2つの「別の過剰」がある。

実際戦後の食糧不足の際は学校ぐるみで「お百姓さんありがとう」運動を展開していたし、数年前にハイブリッド車のプリウスが出たばかりで品薄だった時にはトヨタの販売員は役人のように横柄だった。つまり単純に需要と供給の関係なのだ。そして現在の観点からは、こういう商品品薄や労働力不足はレアケースだ。

次に「失われた・・・」と「高学歴・・・」を並べてみよう。実は博士に就職口がないというポスドク問題ははるか40年も昔からあった。年は食っていてプライドばかり身についてできることはごく狭い売れない分野のみ、これでは企業が敬遠するのも当然だ。そもそも「勉強熱心はえらい」などという義務教育での刷り込みが間違っていたということだ。そしてこの問題は「高学歴・・・」が指摘する90年の大学院大学化で、大きく日常茶飯事となった。

しかし素朴に考えるに、バブルの後始末で極めて有効だった外資系ハゲタカファンドの手法である「部門切り売りとリストラと成果主義」、どうしてこれが「後の10年」では産業界に及んだのに大学には及ばなかったのだろうか。大学の本分は収益ではないとはいいながら、社会にあっては経済的実体でもある以上は何らかの合理化、不採算学部の切り捨てや先生のリストラや非正規化が起こるべきだったのだ。

そして若い先生の非正規化のみが肥大化して起こったのが、昨今の高学歴ワーキングプアの実態である。専任の教授や准教授は相当の給料で各種保険も整備され事実上終身雇用、それに対して非常勤はバイト並みの賃金で契約は年度更改とその差が大きすぎるのだ。そしてこの問題がこの本の著者の指摘するように「一流大学卒ほど安泰」つまり大雑把に言えば「優秀なほど安泰」ならば、学問という知的労働の性格上むしろ当然ともいえる。

だが私が産業界の開発職として見てきた学会は、このような単純なものではなかった。私学を中心におそらくは優秀な受験生を多く取りたいがための経営策として、その大学内ではマシな学生を博士に育てて優先的に専任に採用するという囲い込み運動がはびこっていた。その結果総合的にはあまり優秀でない人が母校の選任になり、一流大学の第二集団あたりがよほど優秀なのに職にあふれるという、いびつ化と学会の貧弱化が起こっていると見える。

総合して「失われた20年」は今でも後遺症が残っていて、もしアベノミクスが失敗すれ

ば今度は「失われた30年」となる、そして現にその道を歩んでいるように私には見える。

18、アナログ分布

以前示したように、「アナログ数」はあたかも墨絵を描く過程のようなものだ。真っ白な画面が0(シュニヤー)、そこから画面割をして大きいところの太い線から入れていく、その各ストロークや手順がアナログ数字になる。だから通常のデジタル数と異なって、一列に整列していないし等間隔でもない。

そう言ったおよそ次元すらない多様な水墨画や絵画について、それでも相互に「似ている・いない」とか「濃い・薄い」とか「上手い・下手」と言った相対的比較を我々は日常的にやっている。同じ絵の途中段階同士なら前後の比較もできようが、モチーフや情景の違う水墨画同士などに共通の評価軸とか視点とかはない。だから厳密には比較のしようもないはずなのに、我々は現に日々比較をしている。

もちろん風景画とキュービズムくらい離れていれば、値段という強引な比較はあっても素直な感情としてはおよそ比較できない。だが水墨画同士と言った共通の土壌があればなんとなく何らかの観点から、必ずしも優劣ではないもののより似ているとか似ていないとかの比較をしてしまうし現にできている。

もっと分かりやすく味の例で見よう。味と言うのもアナログで本来言葉にできない無限次元のものだが、少なくとも心象では「ふーん、こういう感じか」と脳内の位置づけができてしまう。それをあえて言葉にすれば、甘いとか辛いとか苦いとかそんな「軸」になるようなものだ。ただし先にも断ったようにアナログは非順序非等間隔だから、「2倍甘い」とか「負に辛い」とかそういうのはない。だが「かなり」「やや」「結構」「ちょっと」などと言った定性的な形容詞を用いて、不器用ながらもその程度を言うことはできる。

その結果「あんこ」と言えば「甘めで大体この辺」と言った相場観ができ、その相場観に基づいて「今日の最中は少し甘いね」とか「この和菓子は微妙に隠し味があるね」などと各作品の分布を決めることができる。そしてそれら分布の個数をこなすと、一種の散布図ができてくる。だがこの散布図、いったいどういう軸のどういう座標に基づいて分布を認識しているのだろう。

まず言えることは、軸と言ってもまっすぐの1本ではないことだ。分布するものがアナログな味とか人の顔とか言ったものだから、①軸は一意に決まらない、②軸はまっす

瞑想録(その16)

ぐでない、③軸の目盛りは等間隔でない、と言う少なくとも3つの癖を持ったものである。それでも本来の個々の作品のアナログ性に基づけば、かなり枝葉を切り払って強い印象の面だけに簡素化したうえでの「軸」である。当然に線形でもなければ次元もないが、それでも分布する。ここで枝葉を切り取っても残る軸とは冒頭の水墨画の例でいえばほぼ、最初に筆を入れる存在感の強い骨太のストロークに当たる。

もし仮に今3個列記した「3つの癖」を取り払って強引に「規格化」すれば、それは多次元線形空間内の分布になる。したがって加減乗除等の演算が入って、主成分分析と言った多変量解析の統計手法が使えるようになる。結果も数値で出てくるから立派に科学的手続きだ。しかしこの手の統計手法は、しばしば間違った答えを出すことが知られている。科学なのに間違っているのだ。

例えば昔統計によって、「アイヌ人はヨーロッパ人である」という説が出たことがある。頭骨の寸法比等の有限個の数字になる指標をもとに統計解析したら、そういう解が出たというのだ。このような不自然な解が出た原因は、①数値化できる指標が必ずしも代表でないことと、②先の3つの癖をことさらに無視したために分布が歪んでしまったせいだ。似たような例でスラブ語の1つであるポーランド語が、同じスラブ語のロシア語よりも英語に近いという結果が出たこともある。

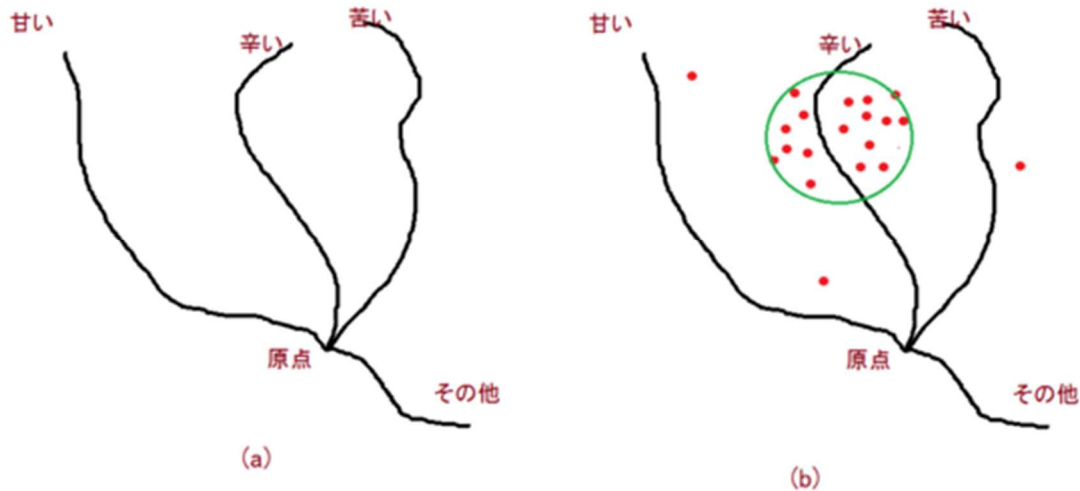
だからここはことさらに絵や言葉や数字にせずにつまり無理やり科学とせずにあくまでも脳内分布として、例えばあんこの分布をイメージすることになる。そうすると中心あたりで濃くて周辺に行くとき疎になるような、一種の分布ができるはずだ。分布ができるということはそれをひとまとめにしてくって「集合」とすることができるのだが、ここで重要なことはアナログの「大体」と言う蓋然的精神を忘れないことである。つまりここでの集合は網羅する必要はなく、むしろイメージとして中心付近が際立つ方が重要である。

こういったいわば「擬集合」の考え方は、学問的集積度は低いが現実に関わっているので机上の空論になりにくい計算機科学の分野ではちらほら出始めているようだ。デジタルの「完全」に慣れた人にはこの「大体」と言う大雑把な割り切りが意外と難しく、重症の場合は精神錯乱に至りかねないほどコペルニクス的な発想の転換が要る。

下の図で左の(a)は模式的に「擬座標軸」を描いたものである。それぞれがまっすぐでもなければ目盛りが等間隔でもなく、また互いに直交(無関係、相関なし)でもない。続いて右の(b)はその擬空間内に「擬点」を分布させたところを模式的に示したものである。特にえんじ色が軸、赤点が分布、緑の囲いが擬集合である。もちろん大体のと

瞑想録(その16)

ころを象徴的に囲ったので、囲いの外に漏れる分布点も出てくる。まあアナログの脳内分布とは、模式的にはこのような物であろう。



19、老人的生活

今までに何回かの記事で、下流老人とか老人破産さらには痴呆の悲惨さの問題について議論してきた。そしてその悲惨さの特徴とは、まじめに社畜もやってそれなりに蓄財し老後は優雅にと思っていた人々が「こんなはずではなかった」破産をしてしまう例が最近急速に増えているという点だ。これは未来の老人である若い人にも、警鐘となる実話である。

もちろん今は人生90年時代であり、一言で老人と言っても世代や年齢によってその有様はかなり異なってくる。特に最近還暦を過ぎたばかりのまだ60代の人々は、老人と呼ぶのも失礼なほどに元気も体力も気力もある。それにまだまだ老人破産に陥っている確率も低いので、結構ノ一気分で優雅に暮らしている老人が多い。中でも一番得をしているのがおそらく昭和25～27年度生まれで今65歳くらいの、いわば「似非老人」たちだ。

現在年金支給開始年齢が長命化や国庫の負担増もあって、段階的に引き上げられている。そんな中でいわゆる「2階分」のみではあるが60歳とともに最後にもらえたのが昭和27年度生まれで、それより若い人たちは61歳以降でないと1円ももらえない。大抵の会社が60歳で事実上の定年であるところ、60歳の1年間に年金がもらえるのともらえないのではシームレスな生活維持に関する心構えが随分と違ってくる。

瞑想録(その16)

特にこの世代は新入社員の数年間はまだ猛烈のサービス残業当たり前の時代ではあったが、さほど長くはなかった。そして他方で10年ほど前から始まった世界同時不況やリストラの嵐についてはほぼ逃げきれているし、他方で年功序列もまだ残っていた。その間もちろん色々はあったが徴兵されたわけでもなく、贅沢さえ言わなければほぼ普通の生活ができた。

もちろん60歳から年金全額がもらえた昭和20年以前つまり戦前生まれの人々はもっと安泰だった。だが彼らは子供のころは戦後でひもじい思いをしたし、会社生活の前半は全部モーレツ人生であった。しかも何より今は後期高齢者になって、そろそろ一定割合で下流老人化したり自分が痴呆になったりしている。

ところで以前にも紹介した「ニートが開く幸福社会ニッポン」の著者の二神能基さん、ご本人もそろそろ70歳になろうというお歳だ。ただかつての同級生の老人生活を見ると、そのほとんどが下記の2種に分類されるという。

- ・やる趣味もなく引きこもり、あらゆる種類の同級会に顔を出し、それでも暇をつぶせない半ウツの老人、
 - ・何かをやらねばならないとしばらく必死でスポーツジム通いをするが、そのうちに何のために自分を鍛えているのか分からなくなって結局引きこもってしまう半ウツの老人、
- の2種類だそうだ。

そしてこの手の老人たち、金銭的には結構恵まれているのでそのお金の使い道は、

- ・高級老人ホームや高い墓地を買わされて業者にどっと搾取される、
 - ・バカ高い国内外旅行のツアーに参加しまくってやはり業者に搾取される、
- のたいていどちらかで、しかもそうやって掴んだり遊んだりしたからと言って決して幸せに見えない。つまり下流老人になって破産するのも幸せでないが、こうやって散財している上流老人も決して幸せではないのだ。

私の知っている老人にも、ななつ星カシオペア大名ツアーに参加したら「駅長自らが自分の荷物を運んでくれた」などと感涙にむせぶ人とか、ちょっと血圧が高かったので用心のために海外旅行を2回もドタキャンして「金だけとられたけど別に痛くないよ」などと言う老人が結構居る。他人事とは言え、あまりにばかばかしすぎないか。

一応断っておくと、退職後も自宅で事業を起こす「やる気満々爺さん」もいまだにたまには居る。だがこういう時局を読めないいまだに昭和みたいな爺さんは、そろって頭が悪い上に結局つぎ込んだ自己資金を全部磨って終わる。また人数的には少ないが

瞑想録(その16)

絵画や俳句や地域ボランティアに精を出す人もいる。地域の展覧会など行くと作者名が「武子」とか「国豊」とか名前で世代を想像できてしまうほどこの手の人々に満ちているが、これらなどかなりマシに救われている例である。

冒頭で引用した二神さん、20～30代でやった学習塾が当たって40～50代は熟年ニートで過ごした。その経験を生かして今は余裕と生きがいでニート活性化のNPOを主宰して、国の委員会の委員もやっている。「今が人生で一番楽しい総仕上げ」と書いていた。私はこの告白に深く納得した。会社と言うところは20～30代の内はしつく会社色に染め上げて安くこき使うが、50の声を聴くころになるとしきりに「独り立ち講座」を推奨する。これは別に会社が社員思いなのでもなんでもなく、単に自主的に早期退職して欲しいだけだ。二神さんの例を裏返せば分かるように、そもそも50を過ぎてから他人にせかされて初めて自分探しを始めても全く遅いのだ。

このありさまでは安倍さんが、「老人も働け(る)社会に」などと言うわけだ。もともと私自身は社畜の時に会社に従順でなかった分、自分に自ら見つけたライフワークを持っている。それは一言で言うと「素朴な疑問と意外な気づき」で、今日もこうして瞑想の結果を自分なりにまとめて充実している。そしてこの作業は必ずしも、私の自己満足に終わるとは思っていない。だから安倍さん、「老人も働け」は結構としても私や素人画家のような少数派の、文化創造に寄与するという選択肢も残しておいて下さいね。

20、数学を学ぶ理由

我々はほぼ誰もが高校まで数学を習うが、面と向かって一体なんのご利益があるのだろうか。

最初に習うのは整数と少数と四則演算すなわち加減乗除である。これらは人が将来どんな職業に就こうとも必要な技術で、いわば平仮名や頻出漢字と同じく基本的リテラシーつまり読み書きそろばんである。仮に文系に進んで永遠に理系と関係なかったとしても、買い物をしたり電車に乗ったり帳簿をつけたり等四則演算は必ず必要だ。そして特別支援でない限り全員が理解できる。つまり四則演算は数学でなく算数なのだ。

知り合いで早稲田大学の文学部を出た秀才だが、「割り算をすると余りが出る理由が今でもどうしても分からない」と言うオバサンが居る。リテラシーとしては電卓をたたくので、日々の生活には困らないそう。これほどの秀才でも割り算と言うものがどうし

瞑想録(その16)

でも、「絵として立体的に」頭に入ってこない。つまりこの辺から「立体的構造的な理解」が必要になるということだ。算数でない数学の始まりである。

多くの生徒が算数の延長をされていてまず躓くのが、分数の通分である。どうして分母をそろえないといけないのか、分子と分母をそれぞれ足すだけで済まないのか一生理解できない。これも先の余りの例と同じで、割ると言う行為が構造的に理解できていないからだ。多くの人にとって通分こそが数学の始まりであり、「理解できなくても日常には困らないが頭の柔らかさや応用力が養われるし計測できる」最初の例である。この例から分かるように算数でない数学の役割とは、事物の本質や規則性を見抜くための統一力や構造発見法さらには広い応用力涵養の練習台なのだ。

次に生徒が躓くのは最大公約数と最小公倍数である。そもそも意味すら分からないので、やり方だけ一夜漬けてもすぐに忘れる。乗除の絵が頭の中で立体的に描けていないと理解できないことだ。ここで試験対策なら一夜漬けて済むということは、やり方に個々のケースを超えた法則性と言うか共通構造があるということだ。そしてこの「共通構造を見抜き理解すること」が、将来実社会で問題や壁にぶつかったときにしばしば役に立つのだ。実社会には本質的に構造がないものも多いので必ずとは言えないが、共通原因や根本原因を見抜くあるいは類似の先例が応用できることに気づくことは強い武器であり、いわゆる頭の良い人ほどこれが得意だ。

続いて生徒が挫折するのが、推測を含む穴埋め問題だ。加減乗除と違ってただ突撃しても済まなくて、逆戻りしての推測が要る。例えば酸素と水素が反応して水ができるときに、「 $2\text{H}_2 + \text{O}_2 = 2\text{H}_2\text{O}$ 」となるがここで H_2O の前に2がつく理由がどうしても分からない。あるいは「 $\text{H}_2\text{O} + \text{OCO}_2 = \text{H}_2\text{CO}_3$ 」とした時の○に何が入るのかどうしても分からないというパターンだ。この手の問題にはバランスを取るための発見が要る。そしてその発見に気づけないのだ。この能力など日常の問題解決の気づきに直結している。さらに進んで二次方程式の整数解を求めるときもこれは、「足して○で、掛けて◎になる数字の組み合わせを見出す」と言う発見の問題だ。クイズに近いのだが、生徒はさらに落ちこぼれる。

こういう基礎的な問題のおそらく最後の難関は「○○算」、例えば鶴亀算とか植木算とかだ。これらの計算は小学校の内は個々具体的に解かせる。だが中学校に行くと未知数を習ってどの算も共通の連立一次方程式として、より一般的に解くことを習う。ところがここで2種類の人がある。連立方程式の方がより根本的で好きだという人と、鶴亀算や植木算のほうが個別だけれどイメージがわくので好きだという2種類の人だ。この選択は個人の資質にも寄るので一概に甲乙つけがたい。この例の示すところは

往々にして世の中は、「一般的であればあるほど無味乾燥であり、具体的であればあるほど面倒だが味わいが出る」という典型的な二律背反の法則である。

つまり世の中の蓋然的な傾向として、「広くかつ味わい深い法則」と言った都合の良いものはない。たいていは「広ければ浅く、深いものが欲しければ知恵を使って対象を絞れ」と言う構成になっている。知恵はできれば「宇宙の大法則」と言った大きなものに使いたいのだが、大抵の知恵の出し時とはむしろ狭く深く掘りたい時の個別の知恵である。そしてその個々具体的な知恵に気づけるか否かで生き残れるか倒産かが決まるというように、世の中はできている。この手の小知恵はヒラリーが天才だ。私はこれを「残念な法則」と呼んでいる。

二次方程式より後に学ぶ微積分とか指数対数とか三角関数とか、これらはもう理系志望の特殊な人々の専権事項であり一般社会では極めて特殊で不要である。結局数学が成り立つということはそこになんらかの普遍的構造、もっと言えば繰り返しがあるとのことだ。そして繰り返しが一か所でも壊れればもう数学は出番がない。つまり出番が限られているという意味で、数学は論理脳鍛錬の優れた道具であるものの同時に偏った道具でもあるのだ。ちなみに繰り返しのことを専門用語で「群」と言う。

例えば市松模様、英語ではチェッカーと呼ぶがこれは規則正しい繰り返しが極めて数学的である。ところがその市松模様の布の上にわずか1か所だけ桐模様が描かれていたとしよう。洋服の生地としてはよくやる技法でそれだからこそ生地に味わいが出て面白いのだが、数学としてはもはや死んでいて手も足も出ない。繰り返しが破壊されているからだ。また陶器等の芸術ではあえて対称性を崩すことが美に直結しているが、壊れた時点で数学としては死んでいる。

この面からは数学は極めて艶消しで、事物をわざわざつまらなくしているといえる。「新しい要素」の発現を拒否しているからだ。私はこれを「群論の呪い」と呼んでいる。ちなみに合理性第一の米国では医学部の入試に数学を課さないところが多い。理由は簡単で、医者は生物や化学は使っても数学を使わないからだ。

では我々が美術展などで美しい絵を見るときに、仮にそこに例えば画面から飛び出しそうなある勢いを認めたとしても、それはあくまでも美術の世界に留まるのであって数学とは一切無関係なのか。私は必ずしもそうは思っていない。我々が発想を転換して、平面や既存の空間や遠近に縛られずに自由に飛翔していけば、あるいはそこに新たな群論の呪いを乗り越えた新たな数学の地平が現れるのではないかと私は思っている。

21、石原慎太郎の田中角栄論

半年ほど前に発刊された、石原慎太郎著の「天才」を読んだ。稀代の宰相で今太閤と呼ばれた田中角栄元総理を、回顧し評論した本である。石原と言えば「太陽族」によって弱冠25歳で芥川賞に輝いた作家で、政治家としてのキャリアも長い。そういった立場から彼なりに田中角栄を評価した本で、特徴は①角栄を一人称で語っていること、②小説家に特有の脚色等はほとんどないことである。小説よりもむしろドキュメンタリーに近い。

政治家になりたての頃の石原は、「金権政治田中角栄」糾弾の急先鋒であった。だが40年がたって彼なりに経験を重ねた結果今の彼の田中の評価は「稀代の天才で業師の愛国宰相」であり、かつて田中おろし運動に加担したことを後悔している。おそらくその後悔が今回の著述の動機であろう。死ぬ前に田中に一言詫びを入れたかったのだ。確かに石原の青嵐会での活動や「ノーと言える日本」等の右翼的思想からすれば、彼がもう少し気が利いたなら田中おろしなどするはずがなかった。

ところで私がこの本を読んだのは、別に石原を尊敬しているからでも彼の思想を知りたかったからでもない。ちなみに角栄論の本は今までに、150冊以上が世に出ているという。つまり田中は良くも悪くも、注目に値する特異な人物だったわけである。そして角栄元総理は私にほかの誰よりも、「善とは何か」を考えさせてくれた。「善とは何か」とはソクラテス以来の長い歴史を持つ哲学の主要課題である。そして私の問題意識とは端的に言って、「悪をしなければそれで即ち善なのか」あるいは「人は天国行きと地獄行きの2種類に単純に仕分けできるのか」と言った点であった。

石原に言わせると田中のロッキード裁判は一つ米国にたてついた田中を葬り去るために米国が仕組んだ陰謀であり、その証拠として当時の米国特派員が「我が国なら司法取引をして無罪にするケースなのにお前たちは自分で親玉をやっつけて正気なのか」と迫ったことを挙げている。さすがに私はこの見解には賛同できない。司法取引と言う制度は日本にはないし、日本は当時ちょうど民主政治が形を整えた仕上げる時点にあったので「宰相であっても例外としない」ことが司法の矜持であったというのが本当のところだろう。

確かに田中は金権政治であった。だが遂行した政策は日本列島の活性化や日本国の強化や隣国中国との国交回復等、どれもが戦後の新生日本の形付けと方向性を決める画期的な事案であった。石原は「田中政権がもう2年長かったら今の日本はは

るかに良くなっていたはずだ」と惜しがるが、私もこれには反対しない。また彼は宰相になる前の参謀クラスの時も含めて数多くの議員立法を提出して通しているが、今までにこれほどやる気にあふれた革新的な政治家はいなかったという指摘もその通りだろう。さらに彼が官僚の指定席だった宰相に高等小学校卒でなったというところに真の人間力を認めているが、確かに人間力は最重要である。

さて、以上のことを前提として田中角栄と言う人物をどう見るのか。金権政治自体が良いわけがない。たとえその多くが良い法案を通すための潤滑剤であったとしても、良くないのである。金ですべてが解決するのなら高畑親子の札びら無罪買いだって何の問題もない、全くの天下御免になってしまう。だが逆に世の中の弁論主義や政党主義や自由主義と言う仕組みが国を動かすのに一々まどろっこしいブレーキだとしたら、悪いのはシステムのほうでありそれに忠実でほとんど何もしないのは善と言うより怠惰ではないかと言う見解もあり得よう。

視点を世界史に移すと何百万人のユダヤ人を殺したヒトラーも、世界に先駆けて高速道路網を建設したなど良いこともしている。ヒトラーの場合無実の殺人をしているのでどれだけ良いことをしても免罪符にはならないが、田中角栄の場合はいわば善悪が拮抗しているというか善がやや勝っている感じがする。

民主主義が今の米国の大統領選挙に見えるように最低限を保証するだけのシステムに過ぎないとしたら、天才がそれ以上の事業を成し遂げることを妨げるシステムはシステムの方がむしろ不適切なのだ。だが難しいことに、行為者が善意の天才であるかどうかを判定する方法がない。ロシアのイワン雷帝(4世)は頭が変で貴族を大虐殺したが、そのおかげで今の統一大ロシアがあるという評価も存在しているのだ。

ところでこの本を読んで初めて知ったことだが、田中が高等小学校卒なのは家が貧乏だったからであって成績が振るわなかったせいではない。それどころか卒業式に生徒を代表して答辞を読むほどに優秀だったのだ。つまり田中の逸話は凡人が良く自己正当化する、「どんなに頭が悪くても据えればできる」などと言う都市伝説の根拠となるものでは全くないのだ。

今はほとんど居ないが昔はこの手の優秀な人が結構居て、多くが労働組合の委員長になり経営者から「敵ながらあっぱれ」と言われたものだ。しかし田中は彼らをも超えて宰相になり、しかもその動機に学歴の恨みは感じられない。むしろ多様な経験や人間性からくる余裕さえ感じられる。それこそ秀才が土木作業員から始めて人生や世の

瞑想録(その16)

中を知り尽くした余裕である。若いころ人生を通して、①根回しの大切さ、②縦割り役人の国家の弊害、③金と賄賂の潤滑油としての効用、の3つを学んだという。

最下層からたたき上げた豊富な経験と人の厚み、これによって田中はそれまで青白い秀才ではなしえなかった大胆な改革や外交を遂行した。その手段として必要悪としての金を、潤滑油として用いた。最下層だったら浜田一幸が居たし金権だったら鈴木宗男が居るが、田中の器の大きさはけた違いだ。角栄がもう2年政権を担当していたら、日本はさらに改革されていたが同時に拝金主義も根付いていたことだろう。

結局善とか悪とかは人に付くのではなく、それぞれの行為に付くのである。「手法は良くないがやったことは正しい」状態は切り離せない抱き合わせなので、一言では評価できない。角栄の真の評価には、日本や世界がもっと進化するもう数十年を待つべきかもしれない。ちなみに16世紀末の画家のカラバッジョはローマ法王から死刑宣告を受けるほどの無法者だったが、それ以上に歴史的な絵画を残していて先日国立西洋美術館でも特集されたほどに評価されている。

22、数学から芸術へ

フィボナッチ数列と呼ばれる数字の列がある。初めの2つを1, 1と置いてあとは次々に足して行くと「1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21…」という数字の列ができる、この無限列のことである。では「足し算があるから数学か」と言うと、そう簡単ではない。数学と呼ぶからにはそこに何らかの構造が必要で、それ以前のものは単に数字の並びかせいぜいクイズなのだ。これは数独(すどく)を数学としないのと同じことである。

例えば「5, 1, 3, 1, 8, 1, 6, ○」と言う数字の列があって○に入るのは何か、こういう問題はよく知能テストとかSPI就活問題に出てくる。もちろん答えは1だ、偶数番目に1が来る規則性は明らかだからだ。奇数番目に何が来るのかの規則は全く見えないうし多分でたらめだが、この規則が分からなくても○の問いに答えるのに何の差し支わりもない。それはこの数字列が数学ではないという主張と同値だ。

フィボナッチ数列の存在を知らない人に、知能テストとして「1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, ○」の列の○の数字を当てなさと聞いてみる。勘が良い人ならこの列の規則を見出して、34と答えるだろう。この問題は先の偶数番目に1が来る数列に比べて規則が見出しにくいだけで、問題の質に変わりはない。それなら「0, 3, 8, 15, 24, ○」とあったとして、○はいくつか分かるだろうか。答えは35であって規則はn番目が「 $n^2 - 1$ 」なのだ。これも一般式で書けるがまだ数学ではなく、クイズである。

ではフィボナッチ数列を数学にするにはどうしたらよいか。それには次のような手品を使う。n番目の数を強引に「 x^n 」と仮定してしまう。ここで「x」は未知数である。数列から明らかなように本来のフィボナッチ数列は単純な指数乗ではなのだが、強引に仮定してしまうところが手品である。すると1番目の関係は「 $1+x=x^2$ 」、2番目の関係は「 $x+x^2=x^3$ 」、3番目の関係は「 $x^2+x^3=x^4$ 」等となって、本質的にどの番目でも「 $1+x=x^2$ 」に帰着できることが分かる。つまりこの時点でやっと、全体を通しての構造が見えたのである。

この構造である「 $x^2-x-1=0$ 」を解くとその解は「 $(1\pm\sqrt{5})/2$ 」と言う2つの無理数の解が出る。そこでこの2つの無理数解をそれぞれ b_1 、 b_2 とした上で「 $n=b_1^n+b_2^n$ 」と作ると、実にこれがn番目のフィボナッチ数列の正確な一般式なのだ。以上の導出過程で一般的な構造式を経由したので、この結果フィボナッチ数列は数学になった。クイズでなくて学問になったわけである。

ここで b_1 は約1.62、 b_2 は約-0.62で、特に b_2 は絶対値が1より小さいので累乗するごとに無視できて、フィボナッチ数はほぼ「 $f_n \doteq b_1^n$ 」と言う指数関数で近似できる。つまりほとんど累乗的に増加していくことも分かる。ここで $b_1 \doteq 1.62$ は一般に「黄金比」と呼ばれて、美術や建築等のあちこちに表れる「最も美しい」と言われる比率である。そのために「フィボナッチ数の神秘性」が良く指摘されるが、私は偶然だと思っている。そもそもなぜ b_1 が最も美しいのか。人によっては「 $\sqrt{2} \doteq 1.414$ 」の方が美しいという人も居れば「 $\pi \doteq 3.14$ 」の方が美しいという人もいるわけで、美が単一の数字に集約されるほど単純だとは思っていません。

それにフィボナッチ数列の作り方をちょっと変えるだけで、「1, 1, 1, 1, 1…」と言う数列や、「1, -1, 1, -1…」と言う数列も作れてしまいます。前者は「先の数に2倍して後の数を引く」、後者は「先の数に2倍して後の数を足す」でできてしまう。しかも今フィボナッチ数列で使ったのと同じ手品で、同様の数学的手続きも提供できます。つまりフィボナッチをちょっと変えるだけで、ほとんど当たり前のつまらない数列に化けてしまうわけです。

他方でフィボナッチ数列に「 $n=b_1^n+b_2^n$ 」と言う展開式があるのならば、展開式を勝手に作って数列にするという逆転の発想も可能なわけだ。そしてその1例が先にクイズとして挙げた「 n^2-1 」だ。つまりこの数列もこれら「一連の展開式の一環」と位置付ければ、そこで数学的手続きが完了してめでたく数学の仲間入りをする。ちな

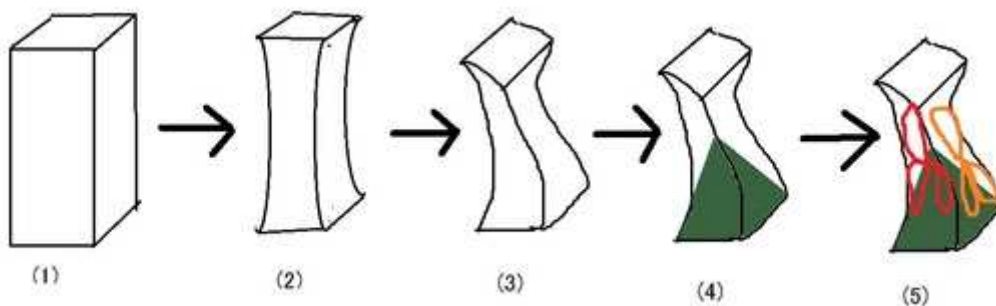
瞑想録(その16)

みに「5、1、3、1、8、1、6・・・」の方はデタラメが入るので、永遠に数学になることはありません。

でも「5、1、3、1、8、1、6・・・」は、例えば「9、5、4、8、8、2、5・・・」などと言う全くのデタラメと比べるとまだ規則性がある。そこで「数学にはならないものの何とか拾えないか」と言う気がしてくる。私はこの時点、つまり規則性の中に非規則性を混ぜ込んだ時点が芸術ではないかと思っています。特に日本の伝統芸術は例えば陶器でも、轆轤(ろくろ)成型した後であえて歪みを入れて対称性を壊すことによってそこにわびさびを入れるという方法が良く取られる。私に言わせれば西洋的な黄金比よりもこちらの方が、よほど味があるし知恵も感じる。

下の図を見て欲しい。陶芸で花入れを作る際の造形発展の一つの模式図で、左から右に進む。最初は直方体(1)(上の口は空いています)で、純粋に幾何学的な図形で空間充填も可能だ。ただ芸術としてはあまりにシンプルで味気ないので、腰の部分に絞ってみる(2)。少しは面白くなったが絞り方にもいろいろあるし、もはや数学的な図形ではないものの規則性は残っている。

さらにと言うことで今度は捻ってみる(3)。さらに面白くなり数学からはさらに遠ざかった。続いて色の工夫と言うことで、斜め半分に織部釉を掛けて変化をつけた(4)。かなり芸術らしくなっただろう。仕上げに側壁に花模様を入れてみた(5)。ここまでくれば立派な芸術で、しかも元の幾何の痕跡は残っていてそれも美の一部になっている。



全てとは言わないが、芸術の多くがかような位置にあるのではないだろうか。

23、ポストインターネット・アート

瞑想録(その16)

最初に断っておきます。今日は以下に芸術特にアートと呼ばれる世界の話を書きますが、私のこの世界に関する認識は平均以下でセンスに至ってはかなり下方に位置すると自覚しています。

歴史を振り返ると、アートにも時代時代に応じてさまざまな様式が提案され実践されてきました。建築に目をやるとそれは、ゴシックだったりバロックだったりチューダーだったりロココだったりモダンだったりするわけです。もちろんこれらの様式は建築に限らず、程度の差はあってもほとんどのアートに様式として浸透していきました。

絵画に目をやると、印象派、キュービズム、アールヌーボー、アールデコ、ダダ、シュール等が出ては消えていきました。この中でアールヌーボーは「新美術」とは言えもう100年も前、アールデコは「装飾芸術」と言う割に工業大量生産に基盤を置いた単純な繰り返し美でした。だから名前がそのまま内容ではないわけです。

そういった流れで近代にはモダンと言う様式が興隆しました。その内容は極端なほどに無駄を排した機能美と言いましょか、合理精神をそのままアートに取り込んだようなテクスチャーで、戦後当時の合理主義や自由民主主義の反映とも言えるでしょう。そして当時の人々にはモダンまで行きついたのでアートは完成したと考えた人もいたようですが、実際は「最上にもっと上がある」みたいな現象が起こり、それがポストモダンでした。

行き過ぎた合理性からアートを取り返しなおも進むというコンセプトで、多少それ以前の芸術様式も復古させつつも根本的に「モダンなんてもう古いんだよ」と思わせる、もしくはそういう傾向を志向した様式です。代表作品が東京都庁でもう30年もたっていますから、ドッグイヤーで「5年ひと昔」と言われる割には長続きしています。

さて、現代の技術進歩がそのまま申し子になったのがインターネットやIT技術を使ったアートです。具体的には特にイラストレーションとかアニメ分野、いずれもバーチャルがその本質で、ブツがなくてもアートが出来るというのはアーティストをずいぶんと身軽にしました。さらにソフトならではの新合成技術にも富んでいて、新進アーティストを刺激しました。

インターネットと言うと狭義には、スタンドアロンのIT機器をネットでつないで通信制つまり情報融通性を高めたものを言います。メールは30年、ホームページは20年、ブログは10年の歴史を持ちますが今やこれらのいずれも古くて、今主に使われているのはフェースブック、ツイッター、ライン、タンブラー、ピクシブ、インスタグラム、セコン

瞑想録(その16)

ドライブ、ストリートビュー等です。これらだって5年後にはどうなっているかわかりません。

イラストサイトのピクシブやアニメも投稿できるユーチューブやニコニコ動画など、いずれもその特徴はギンギンにソフトカルチャーであってどんな妄想も入れ込むことができるということです。これが今日の広い意味でのインターネットです。実際そこで閲覧できる作品の作者はほとんどが素人ですが、その仕上がり度とアイデアの知恵にはただただ感心させられます。今10代～20代の若い人々は物心ついた時からこれらのバーチャル環境にいるわけですから、世の中の構成は第一義的にはバーチャルで、その外側にリアルがあるという感じになります。

その広義のインターネット技術はまだまだこれから進歩して、人工知能などを考えるとまだ道のりの半分も行っていないかの感じがします。ですがアートの世界ではポストモダンよろしく最近ではポストインターネットという言葉が聞かれてくるようになりました。コンセプトとしてはバーチャルとリアルを二項対立させるのではなく、むしろ融合させて新しいアートの世界を作ろうという運動もしくは方向です。美術書誌も特集を組んでいますし、文化庁メディア芸術祭でも今年のキーワードになっています。

このポストインターネットと言う方向、出るべくして出現してきた感じはしますが、今のところまだ試行錯誤あるいは実験段階にあるように思えます。つまりポストインターネットの解釈がアーティストごとに違っていて、単純にバーチャルな絵とリアルな絵をコラージュする段階あるいはバーチャルな絵の特定部分を切り出して印刷し物質化している段階から、リアル風バーチャルとかバーチャル風リアルみたいな「融合もの」が配合具合を異にして色々提示されています。

アートとしてはできれば何らかのモチーフあるいはメッセージが必要で、そのためにはバーチャルとリアルがシームレスに繋がっているべきですから、その辺に工夫があるようです。バーチャルの洪水に警鐘を鳴らすあるいはリアルの世界に人類の故郷を見せるといったモチーフのものから、いわばバーチャル・リアルミックスの技術で例えばIT特有の情報管理社会の恐怖を预言するといったもの等、数え上げるときりがないのですが、全体としての一定の潮流のようなものはまだ見えていません。

その意味でポストモダンと異なりポストインターネットはまだ様式と呼べるところまで行っていない、むしろこれから期待すべきものなのかもしれません。様式がないこと自体が一種の不安であって、面白みの中にも何か不安定さを感じさせる作品が多いようです。具体的な作品は著作権の問題もありますので、例えば雑誌「美術手帖」の

瞑想録(その16)

15年6月号を見てください。

24、吉野家のどんぶり吉野家のどんぶり



「イワシの頭も信心から」という言葉がある。信仰の本質を突いた言葉で、普通の人から見ればどんなにばからしいものでも信者にとってそれはお宝に見えるという意味だ。

ある人に「信仰対象の観点から最もくだらないものは？」と聞いたところ、返ってきた答えが「ビール瓶」だった。「ビール瓶信仰」、あの形にも特許はあるのだろうが信仰対象としては確かにくだらない。また別のある人が「沖縄そばを注文したら出てきたのは普通のラーメンだった」と報告していたので「どんぶりがヤチムン焼だったのでしょうか」とコメしたら、「怒りが失せるほど力が抜けた」と返された。

どうも器は一般庶民にとっては付属品に過ぎないというか、注目に値しない対象のようだ。ところで日本を代表する大衆食品の牛丼、この全国チェーンは現在吉野家、す

瞑想録(その16)

き家、松屋、なか卯の4社が挙がる。この今日はこのドンブリの、料理のほうでなく器の方にあえて注目したい。

牛丼は1食300円程度でおそらく最も庶民的でお手頃な食べ物なのであろうが、なぜかこのチェーンも器であるドンブリはプラスチックでなく落とすと割れる陶器製だ。そしてどのチェーンのドンブリもデザインをよく見ると、もちろんプリントではあろうが安さに反していずれも優れたデザインである。中でも吉野家のドンブリは、さすがは元祖と言えるほどに芸術品としても美しい。オークションでも結構な値段がつくそうだ。

画像を見てわかるように、デザインは有田焼の基本的パターンを踏襲している。壁面を4面に分け、反対側の2面同士は基本的に同じ図柄で幾何学的である。そしてそのそれぞれの真ん中に窓を開けて、こちらには対照的に物語的な絵を入れるという構造だ。基本的幾何学模様はどちらの面も斜め格子で、1面は黒色の地に黄色の3本線、他の面は白地に赤の3本線で、その意味で統一感がある。

格子縞の原型は市松模様(チェッカー)である。市松模様は規則正しく、つまり数学的である。その基本単位は白黒が交互に置かれた4枚の四角であるが、これ以上は分解できない。似た例で結晶構造の場合も面心立方とかペロブスカイトとか基本構造には個々に名前を付けるしかないので、ここでも市松模様の基本単位は市松でその単純繰り返しと言う表現になる。

市松の段階でもバリエーションは色々作れる。白黒の色を別の色にするとか、市松の中四角よりもその境界線の経糸横糸を強調する等である。糸の方を強調したのが格子縞で、これも格子糸を何本にするかとか色の対比をどうするか等で色々のバリエーションがつけられる。そして格子の段階でも依然として幾何学的である。チェッカーの代表はスコットランドのクランタータンで、氏族ごとに異なったチェッカーパターンを用いていてちょうど家紋のような役割をしている。縦横の格子は布模様の制作技法の内でも、織(おり)にもっとも相性が良い布模様である。

吉野家のドンブリの場合は格子模様を斜めにしてあるのでもはや織にはなじまないが、依然として数学的である。つまり基本単位の繰り返しでそれ以外の何の混じり物もなく、そこで追及されているのは様式美である。様式美だけでも十分にアートなのだが、しばしば単調さを崩すためにあえて「混ぜ物」を入れてことさらに数学から外すのがデザインの基本である。

瞑想録(その16)

吉野家のドンブリの場合それは窓で、窓の中には様式美と反対の叙情物を入れる。それは例えば梅の木であったりあるいは「波とウサギ」のような縁起物、あるいは染付による中国的な景色だったりする。そして吉野家の場合は正面には牛を形象化したような対象模様を、側面には日本の象徴の桜の木を配している。なお記念品などドンブリによって桜の木の部分は記念文字とかに入れ替わるが、基本の地と窓の大きさが不変なために全体としての統一感や同一感は失われていない。

長々と吉野家のドンブリについて分析をした。それは似たような「数学的形式美」「その交代パターン」「それらに変化をつける形象的バリエーション」と言う組み合わせが、実はアートの色路な場面で現れる典型だからである。つまり「数学＋変化」あるいは「複数の結晶構造の連続と交代＋界面あるいは不純物」と言う構造は、変化や不純物の存在によってもはや数学では取り扱えないものの全体として数学的名残がアートに統一感と安定感を与えている。

そんなもう一つの例として、ここでは踊りを取り挙げてみる。踊りと言っても多種あって、全体が物語構成になっているクラシックバレエや歌劇には繰り返しは見えずにむしろ絵巻物のようなものである。他方盆踊りとかフォークダンスとかエアロビクスダンスのように多くの人が練習なしで参加できるようなものは、繰り返しや交代繰り返しさらにはその上位パターンとしての「装飾型交代繰り返し」がしばしば見られる。

装飾型交代繰り返しとここで呼んだものは、例えば基本動作が「①拍手しつつ1歩前進、②止まって手をハの字に払う」の繰り返しだとして、この繰り返しを数回踊った後により複雑に「①拍手した後に手を前に突き出す、②回転しながらハの字を書く」と言った感じで複雑化していくパターンである。伴奏する音楽もよく聞くと、複数の基本的メロディを基にした装飾型交代繰り返しとして同調している場合が多い。

また踊りの各基本単位、今の例でいえば拍手とかハの字とかの素朴な動作の内部を見ると、これはこれで交代群とか何らかの群が入りそうなほど数学的だ。それはあたかも、何気に雪の結晶を見るかのようなのだ。体の前後左右の対称性を、そのまま踊りの形に反映している。その意味で多重に数学的である。

まあこのようなわけで、アートの全部とは言わないまでも基礎単位が数学的あるいはその発展形である場合が結構多い。仮にこの「発展形も表現できる数学」があったら世の中はもっと面白いと思うのだが、あったとしてもおそらくデジタルの厳密性とは両立しないだろう。

瞑想録(その16)

2016. 11. 09